

経済産業省委託事業

平成 20 年度サービスイノベーション創出支援事業

(サービス産業能力評価システム構築支援事業)

学習塾講師能力評価システム高度化事業

報 告 書

平成 2 1 年 3 月

学習塾講師能力評価システム高度化コンソーシアム

目 次

I. 学習塾講師能力評価システム高度化の背景と目的	1
1. 事業の背景	1
2. 事業の目的	1
3. 調査の内容・方法	3
(1) 事業フロー	3
(2) 事業内容	3
II. 学習塾講師能力評価システム高度化の全体像と考え方	5
1. 学習塾講師能力評価システム高度化の方向性	5
(1) 能力評価システムの高度化の方向性について	5
(2) 検定試験や評価項目の高度化の方向性について	5
2. 学習塾講師能力評価システム高度化の全体像	6
(1) 学習塾講師能力評価システムの全体像	6
(2) 集団指導1級と2級の到達水準	7
3. 学習塾講師能力評価システム高度化の特徴	10
(1) スキルディクショナリ、自習用DVDについて	10
(2) 検定試験制度の客観性・公平性を担保するために	10
(3) 審査の効率性を追求するために	10
III. 学習塾講師の能力開発を促すための方策	12
1. 学習塾講師のスキルディクショナリ	12
(1) 学習塾講師のスキルディクショナリとは	12
(2) スキルディクショナリの全体像・構成	13
(3) スキルディクショナリの項目一覧	14
(4) スキルディクショナリ各ユニットの詳細	15
2. 学習塾講師自習用DVD	30
(1) 作成のコンセプト	30
(2) 映像イメージ	30
IV. 検定試験制度の評価方法・配点について	31
1. 評価項目・チェックシートの構成と一覧	31
2. 集団指導2級について	32
(1) 集団指導2級の評価チェックシート・配点(80点満点)	32
(2) 集団指導2級の審査方法	34
3. 集団指導1級について	38
(1) 集団指導1級の評価チェックシート・配点(150点満点)	38
(2) 集団指導1級の審査方法	41
V. 今後の普及策と更なる取組課題	45
1. 学習塾講師能力評価システムの普及策について	45
(1) 広報活動について	45
(2) スキルディクショナリの効果的な活用、更なる高度化について	45

2.	今後の取り組み課題について	46
(1)	集団指導2級の評価方法変更について	46
(2)	集団指導1級の立ち上げについて	46
(3)	その他の取り組み課題	46
VI.	資料編（委員会名簿・議事概要）	47
1.	学習塾講師能力評価システムの高度化研究委員会 委員名簿	47
2.	学習塾講師能力評価システムの高度化研究委員会 議事概要	48
(1)	第1回研究委員会	48
(2)	第2回研究委員会	55
(3)	第3回研究委員会	62

1. 学習塾講師能力評価システム高度化の背景と目的

1. 事業の背景

近年、私学志向や公教育不信等を背景に、学習塾を利用する児童・生徒数は増加傾向だが、その講師については、約6割が大学生を中心とした非正社員である実態が指摘されるとともに、その課題として「定着率の低さ」「能力開発機会の不足」「講師の能力評価に関する客観性の欠如」等が挙げられている。

これらの課題を踏まえ、社団法人全国学習塾協会では、各学習塾における優秀な人材の確保・育成を図るために、学習塾講師能力評価システムの構築に取り組み、平成19年度には、学習塾のミッションと期待される講師像を定義した上で、「学習塾講師集団指導2級（以下、集団指導2級）」及び「学習塾講師集団指導1級（以下、集団指導1級）」検定試験の枠組みを設計したところである。

当該検定試験については、既にその体系や認定者の要件などが整備され、おおよその評価項目なども策定されている一方、さらなる改善の可能性として、実際に評価をする際に、審査基準等をより明確化すべきであることや、被評価者（塾講師など）にとって目標とすべき到達点をより明確にすることで能力開発のツールとして活用できることなども指摘されている。検定試験の効果的な普及のためには、当該試験内容の精査（審査基準、評価項目、評価体制など）を行い、特に被評価者の能力開発に資する検定試験制度へのさらなる改善が効果的と考えられる。

特に「集団指導2級」については、本年度からの試験運用がなされるところであり、早急な改善が求められている。

2. 事業の目的

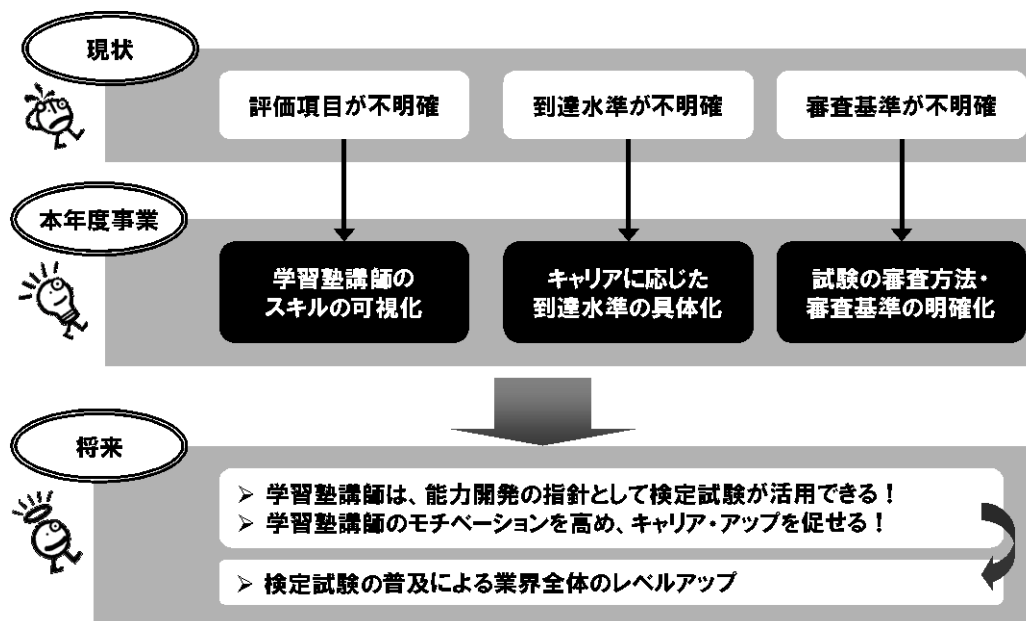
前述の課題を踏まえ、既存の検定試験の内容について、『学習塾講師のスキルの明確化・標準化に資する検定試験』および『学習塾講師のキャリア・アップ、モチベーション向上に資する検定試験』に高度化することが本事業の目的である。

そこで、本年度事業においては、平成19年度に設計した検定試験の枠組みを有効に活用しつつ、当該検定試験制度の内容について、「①学習塾講師のスキルの可視化」、「②キャリア・アップの指針となる到達水準の具体化」、「③審査方法の標準化と審査基準の明確化」を実施する。

なお、本年度事業の成果は、学習塾業界の講師を対象とする「集団指導2級」及び

「集団指導1級」検定試験の運営に永続的に役立て、活用することを想定している。具体的な活用方策として、「学習塾経営者」にとっては、講師の能力を査定する際の基準、適正な評価・処遇を可能とするツールとして、「学習塾講師」にとっては、能力開発の指針として活用するとともに、評価や転塾の際にスキルをアピールする材料として活用できるものとする。「初任者講師・講師志願者」にとっては、自習ガイドとして、あるいは教務スキルを身につけるための材料として活用できるものとする。

図表 I-1 事業目的と検定試験の将来イメージ

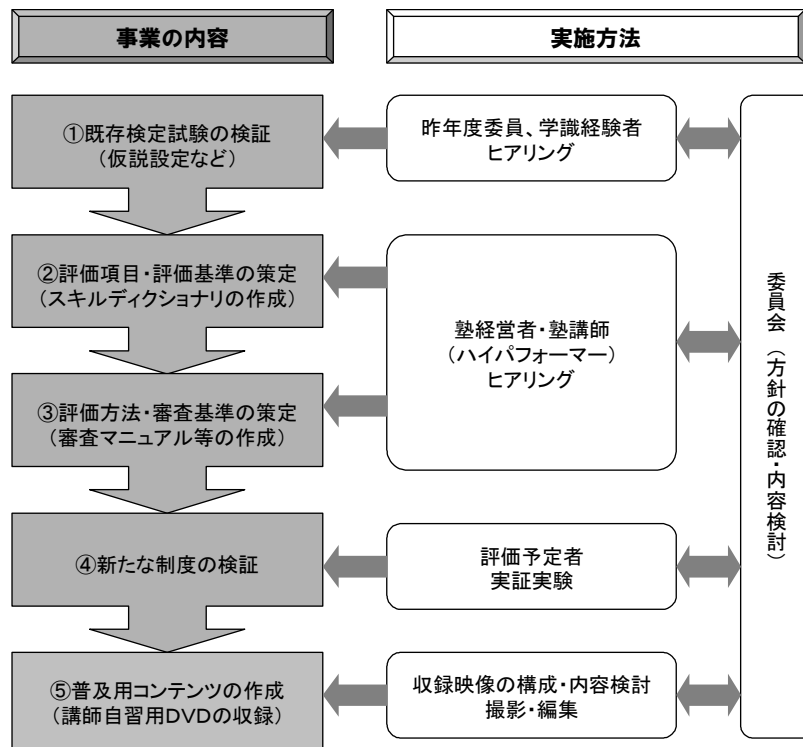


3. 調査の内容・方法

(1) 事業フロー

本年度事業の具体的な内容・遂行方法は以下の通りである。

図表 I-2 本年度事業の内容と方法



(2) 事業内容

本年度事業の具体的な内容・遂行方法は以下の通りである。

① 既存検定試験の検証（仮説設定など）

事業の本格実施の前段階として、昨年度制度設計がなされた検定試験の評価方法と審査基準について、昨年度委員・学識経験者ヒアリングによって、その妥当性を検証し、課題を明確にしている。

② 評価項目・評価基準の策定（スキルディクショナリの作成）

いわゆる「ハイパフォーマー」と呼ばれる学習塾講師の行動や学習塾経営者の考えをヒアリングすることによって、学習塾講師が授業をする際に必要となる行動基準（コンピテンシー）を整理する。

なお、ここで言う「スキルディクショナリ」とは、明白に良好なパフォーマンスを発揮している講師などの共通する行動基準（コンピテンシー）を網羅的に明文化し、

キャリア段階別の到達水準を設定したものであり、塾講師が自学自習を行う際の指針となるようなものである。また、それが検定試験の評価項目・評価基準に連動することになる。

③ 評価方法・審査基準の策定（審査マニュアル等の作成）

②で策定した評価項目・評価基準について、その評価方法や審査基準を策定する。具体的な採点方法や判断基準を明示し、審査が客観的かつ統一的になされるよう、審査マニュアル等を作成した。

④ 新たな制度の検証（実証実験）

②、③で策定された検定試験制度について、試験的に活用し、実際に評価してみることで、運用上の課題などを明らかにし、その改善を行った。

⑤ 普及用コンテンツ（講師自習用DVDの収録）

検定試験の普及に向けて、検定試験受験志願者である学習塾講師や初任者講師・講師志願者が、自学自習に活用できるよう、自習用映像コンテンツを作成した。

なお、これらの事業内容について、方針を確認し内容を審議するため、研究委員会を設置し、計3回の審議・検討を実施している¹。

¹ 研究委員会の委員名簿、議事概要は「資料編」を参照。

II. 学習塾講師能力評価システム高度化の全体像と考え方

1. 学習塾講師能力評価システム高度化の方向性

(1) 能力評価システムの高度化の方向性について

学習塾講師能力開発システムについて、以下のような方向性で高度化を試みている。

- 本システムの目的は、若手の塾講師（特に初心者）に対して、塾講師に求められる知識・技術・能力を体系立てて明示し、自己啓発・能力開発の一助とすることである。
- 塾講師に共通して求められる知識・技術・能力をまとめたスキルディクショナリ（及び自習用DVD）を普及させることで、若手塾講師の自己啓発を促し、また、それに伴う検定試験を整備することで、能力開発の基準や初期段階のキャリアアップパスを可視化することが可能となる。塾講師の自己啓発・能力開発の円滑化・標準化は、業界全体のボトムアップに寄与し、ひいては、業界の健全なる成長・発展に寄与するものである。

(2) 検定試験や評価項目の高度化の方向性について

学習塾講師能力開発システムについて、以下のような方向性で高度化を試みている。

- 塾講師には「個別生徒の状況に応じて臨機応変に対応する能力」等が不可欠であり、塾講師の個性なども重要視されるが、本検定試験では、学習塾講師が身につけるべき事項のうち『共通して求められる知識・技術・能力』、『客観的に判断しうる知識・技術・能力』を対象範囲に限定する。
- 映像によって評価者が審査を行う検定試験の性質上、本検定試験の評価対象は『塾講師の行動』となる。つまり、知識・能力・技術が行動に現れていない場合は評価できない（してはならない）。塾講師の「意識」も行動に現れている場合のみ評価が可能である。
- 普段の授業内容は、単元内容や前後の授業展開によって異なるが、検定試験のために実施する授業については、評価項目を予め示した上で一定のルールに基づき展開する必要がある。
- 「検定試験の対象範囲・評価対象」を幅広く周知する社会的責任がある。特に、本検定試験は学習塾講師の全能力を評価しているものではないことを明示するとともに、塾講師は試験合格後も慢心せず、さらに応用力を磨く必要があることを明示する。

2. 学習塾講師能力評価システム高度化の全体像

(1) 学習塾講師能力評価システムの全体像

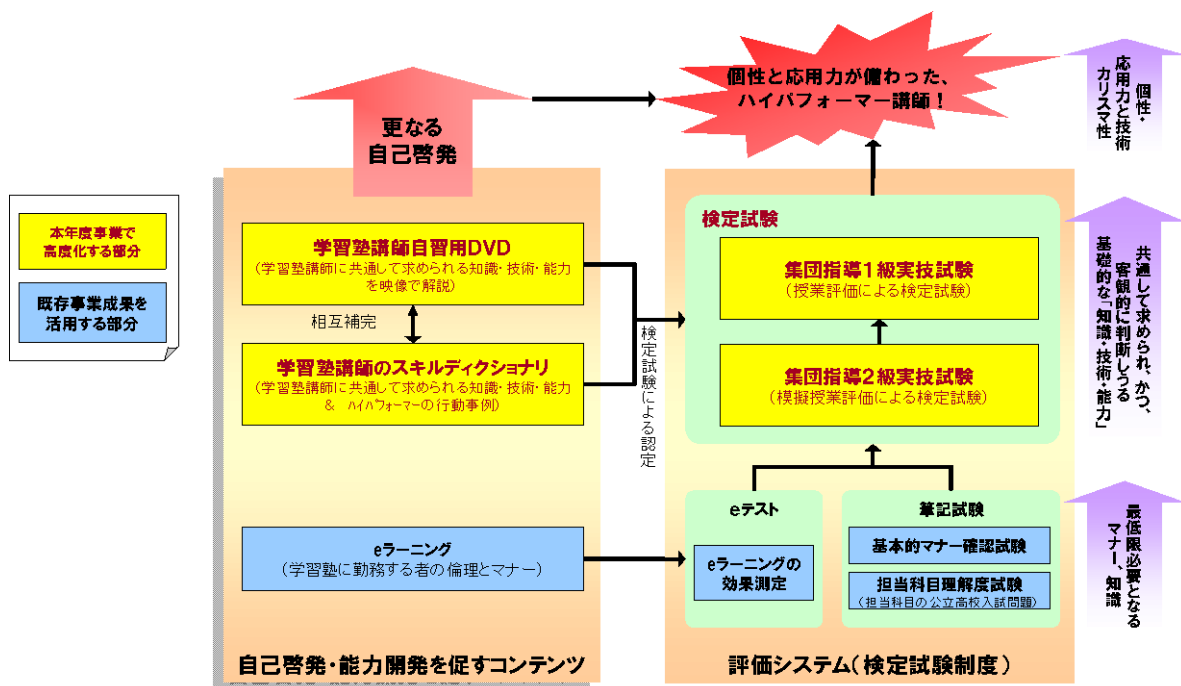
学習塾講師能力評価システムの全体像は、下図の通りである。

『自己啓発・能力開発を促すコンテンツ』は、塾講師に共通して求められる知識・技術・能力をまとめたスキルディクショナリ及び学習塾講師自習用DVDを作成し、普及させることで、若手塾講師の自己啓発を促すことを目的としている。

『評価システム（検定試験制度）』は、スキルディクショナリや学習塾講師自習用DVDで学ぶ事項に連動させる形で評価項目を設定している。

両者を体系的に整備することによって、特に初心者である塾講師にとって、能力開発の基準や初期段階のキャリアアップパスが明確になり、自ら自己啓発・能力開発を進めることができることになる²。

図表Ⅱ-1 学習塾講師能力評価システムの全体像



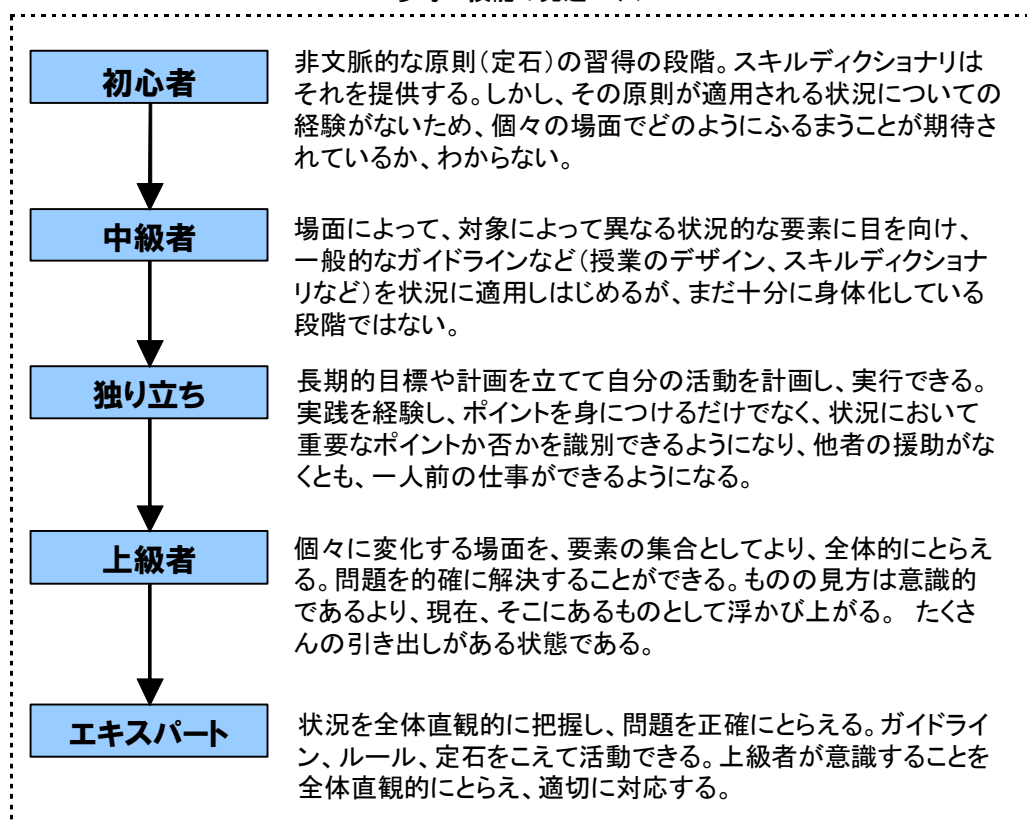
² 各種コンテンツや検定試験制度の詳細は後述。

(2) 集団指導 1 級と 2 級の到達水準

① 技能発達モデルと学習塾講師の技能発達

一般的に、技能の発達モデルは以下の通り整理される。

参考：技能の発達モデル



(注) Dryfus & Dryfus 「純粹人工知能批判」アスキー出版、Benner, P. 「看護論」医学書院などによる。ただし、文面は、本プロジェクトの目的に即し委員長（玉川大学山口教授）が作成した。

学習塾講師としての技能発達についても、この概念に基づき、整理が可能と思われる。その考え方を以下に示している。

参考：教師の技能発達について

- ・ 教師には、専門教科の知識や対象となる学習者の知識、そして、教授法の知識がもとめられる。それぞれの知識は教科書や先輩の言葉など、言語化されて伝達される。ただ、それは実践から抽出された原則やポイント、こつであって、その背景を知ることは実践を通してである。
- ・ 学習塾講師は、上記の知識を言語を介して習得する。しかし、実践の場（集団指導）においては、それぞれに異なる塾生、場面を、適切に対処することをもとめられる。それは、技（art）なのであって、運転技能やゴルフの技など、言葉による知識をこえたもので、「身体化された知」である。
- ・ 実践の場での技能の発達は、テキストで示される知識や行動の原則を、状況のなかで適切に使用できることがもとめられるが、実践の場にはじめて参加する初心者は、目標の実現のために何をどうしてよいかわからない一方、すぐれた教師は、状況を全体として把握し、変化する状況に適切に対応して、その目標を実現する。
- ・ 初心者、中級者などは、実践にある原則やポイントを身につける段階で、「型を身につける」というのはこれである。一方、すぐれた講師たちは、もはやひとつひとつのポイントや原則を意識することはない。活動そのものがそれを体現しているために、判断は直観的である。さらに、カリスマ、あるいはエキスパートと言われるレベルの教師たちは、ポイントや原則にしばられることはない。ポイントや原則をはずしても問題はないのであり、ときには意識的にははずすこともあるが、それは「創造的破壊」のレベルにある。

（注）委員長（玉川大学山口教授）作成。

② 集団指導 1 級と 2 級の到達水準

本事業にあたっては、前述の考え方と事業目的を鑑み、集団指導 2 級・1 級の到達水準については、以下のような共通認識のもとで検討を実施した。

< 集団指導 2 級の水準 >

集団指導 2 級は、集団指導の講師をはじめて 2、3 年であり、実践のなかでポイントを身につけつつあるレベルにある人たちを対象とする。技能発達モデルの 5 段階では、ほぼ中級者のレベルである。

ただし、経験を積んでいるといっても、時間をこなす方法を身につけただけかもしれないのは、独学で、自分の教室経験をくり返している場合もある。

したがって、スキルディクショナリーなどを通して、指導のポイントや原則を知識として知っていることは大切である。検定では、集団指導として多くのベテランが指摘するポイントや基本と成る知識を前提として、状況に適応しているかどうかを評価することである。

＜集団指導 1 級の水準＞

集団指導 1 級は、上記のポイントや知識を十分に理解し、実際に状況に活用できているかどうかを評価する。発達モデルでは、「独り立ち」のレベルで、経営者は彼／彼女に授業をまかせることができる。

年数的には、講師をはじめて 3、4 年を経ている人たちがその対象となるであろうが、単純に年数で測れないのは、ときとして、独学の場合は、独りよがりの場合も少なくないからである。

＜それ以上の水準＞

それ以上のレベル、つまり、上級者、エキスパートといった人々は、基本を十分に理解しつつも、それぞれの型を持っているのであって、それはよい意味での「個性」である。初心者用にモデル授業をしてほしいと言えば、それを実行することは容易である。しかし、実際には、生徒の状況によって柔軟に対応し、しかも生徒のやる気を高めることに成功するであろう。こうしたレベルは検定の対象ではない。

3. 学習塾講師能力評価システム高度化の特徴

(1) スキルディクショナリ、自習用DVDについて

「スキルディクショナリを示すと、塾講師から記載された項目のみを身につければよいとの誤解を受ける。塾講師の行動を、一律に型にはめることは不可能ではないか」という懸念がある。

スキルディクショナリでは、一律に型にはめることを意図しているのではなく、初学社が学習しやすいように、塾講師に必要なかつ共通の能力をブレイクダウンし、共通の行動基準として必須の項目（学習塾講師の必要条件）を可能な限り詳細に記述している。なお、行動基準の表現方法は多様であること示すために、その行動事例を収集し、例示している。

また、「塾講師は、授業を全体で捉えており、各行動を独立して捉えてはいない。行動基準をブレイクダウンすることによって、かえってわかりにくくなる恐れがあるのではないか」という懸念については、塾講師の理解を促すために、スキルディクショナリを補完する学習塾講師自習用DVD（学習塾講師に共通して求められる知識・技術・能力を映像で解説）を作成し、実際の授業イメージを理解してもらう工夫をした。

(2) 検定試験制度の客観性・公平性を担保するために

「検定試験において、評価基準を揃える（主観を可能な限り排除する）ために、どのような方策があるか」という課題については、最低限の基準を満たしているか否かを判断すればよい集団指導2級は、可能な限り実施の有無（○×）で評価できる状態にし、ネガティブチェックで採点すれば、判断基準を揃えられることがわかった。実施している場合のレベル評価などは原則排除している。

「集団指導1級と集団指導2級の基準を如何に設定するか。また、採点ウエイト、合格水準を如何に設定するか」という課題については、一定の行動基準を満たしているか否かを判断すべき集団指導1級は、実施の有無（ネガティブチェック）だけではなく、実施している場合の充足度を判断基準に入れている。その際、採点ウエイトは、ヒアリングの対象となったベテランの塾講師が、須く重視している行動にウエイトを置いている。合格水準は、2級は一定の必須項目を基本的に満たしている（8割）ことを重視し、1級はそれに加え、一定項目を十分に満たしている項目があることを評価することとした。

(3) 審査の効率性を追求するために

「導入、展開、まとめの全てを評価するのは時間がかかり過ぎるのではないか。現状の評価項目を全て確認するのは時間がかかり過ぎるのではないか」という懸念については、以下のように、審査方法を改善することで対応した。

< 審査方法の改善方策（1級・2級共通） >

- ① 開始から5分前後に、一旦映像を止め、「導入部分」の採点を終える。
- ② その後映像を再生し、開始から10分前後に再度映像を止め、「展開部分」の採点を終える
 - ※ なお、この時点で採点ができない審査者がいる場合は、その審査者の採点が終わるまで上映を続ける)
 - ※ 「展開部分」までの採点が終わった時点で、終了3分前の時点まで映像を早送り。
- ③ 終了3分前から終了時点までの映像を再生し、授業終了後「まとめ」部分の採点を終える。

III. 学習塾講師の能力開発を促すための方策

前章で示したとおり、学習塾講師の自己啓発・能力開発を促すためのコンテンツとして、「学習塾講師のスキルディクショナリ」と「学習塾講師自習用DVD」を作成した。

1. 学習塾講師のスキルディクショナリ

(1) 学習塾講師のスキルディクショナリとは

『学習塾講師のスキルディクショナリ』は、学習塾講師に共通して求められる基礎的な知識や技術、能力を具体的に記述したものである。スキルディクショナリは、これから学習塾講師を目指す方や新任講師の自学自習を促すことを目的として作成しているが、中堅・ベテランの講師も、自らの基礎力を再確認し、能力開発に役立てられるような構成となっている。

スキルディクショナリでは、学習塾講師が授業を行う際に実施すべき行動を「①授業の流れ」、「②各段階で望まれる行動」を軸に分類して整理している。学習塾講師の得意・不得意分野を明確にして、不得意分野は克服して基礎力を身につけるとともに、得意な分野はさらに磨きをかけることによって、学習塾講師自身が理想とする優れた学習塾講師を目指すことを目的とした。

なお、スキルディクショナリの内容が実際の授業ではどのように表現されるのかを例示するために、『学習塾講師自習用DVD』では、スキルディクショナリの内容を映像で解説している。併せて活用すれば、実際の授業イメージも理解できるよう機能を補完させている。

スキルディクショナリに記載されている「求められる行動基準」は、学習塾講師の検定試験である「集団指導2級」「集団指導1級」の評価項目に使われており、スキルディクショナリを用いて自己啓発・能力開発をすることは、塾講師としての基礎力を身につけることのみならず、検定試験の合格にも繋がるように連動させている

(2) スキルディクショナリの全体像・構成

学習塾の授業は基本的に「導入→展開→まとめ」の構成となっている。学習塾講師は、授業の流れに応じた適切な行動を取る必要がある。

学習塾講師が授業をする際には、「塾生に学習を動機付け」「塾生に授業に集中させる」とともに、「塾生に学習内容を理解させる」ための行動を取る必要がある。それぞれ必要となる行動は異なり、必要となるタイミングも異なるためである。



(3) スキルディクショナリの項目一覧

	I. 導入	II. 展開(演習)	III. まとめ
A 学習を動機づけるための行動	<p>1. 授業の位置づけの明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> 当該単元や本日の授業で、何をやるのかを明確に説明している 前後の授業や他の単元などとの関わりを説明している <p>2. 授業内容に興味を持たせる工夫(導入時)</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業内容について、塾生に興味を持たせる工夫をしている 	<p>1. 授業内容に興味を持たせる工夫(展開時)</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて、授業内容について、塾生に興味を持たせる工夫をしている <p>2. 授業中の激励など</p> <ul style="list-style-type: none"> 塾生の反応をみて、励ましの言葉ややる気を喚起させる言葉をかけている 	<p>1. 授業の位置づけの再確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 本日の授業や当該単元では何をしたのかを説明している 前後の授業や他の単元との関わりを説明している <p>2. 授業内容に興味を持たせる工夫(まとめ時)</p> <ul style="list-style-type: none"> 本日の授業内容について、塾生の復習や次の予習を促す工夫をしている
B 学習内容を理解させるための行動	<p>1. 導入時の説明・発問のタイミング</p> <ul style="list-style-type: none"> 最初の説明や発問のタイミングが適切であり、円滑な授業の展開を導いている <p>2. 導入時の説明・発問の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 最初の説明や発問は、適切な題材を用いて、塾生にわかりやすく問いかけている 	<p>1. 適切な説明・発問・例示</p> <ul style="list-style-type: none"> 例示や発問の回数・タイミングが適切である 塾生の理解の定着を図るために、工夫された説明・発問・例示がある <p>2. 塾生の理解確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 塾生の理解度をチェックするための発問をしている 塾生の表情や応答などから理解度を解釈し、確認している <p>3. 説明・発問・確認・対応の流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> 塾生の理解を促すための発問・確認・対応の流れが適切である 特に授業の要点などが明確にわかるように説明している <p>4. 塾生の応答に対する対応</p> <ul style="list-style-type: none"> 塾生の応答に対するリアクションが適切である 塾生に確認したことを活かした説明ができています 	<p>1. 塾生の理解確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 塾生の理解度をなんらかの方法で最終確認している <p>2. 要点の明示</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業の要点などが明確にわかるように再度説明している
C 授業に集中(参加)させるための行動	<p>1. 導入時の話し方</p> <ul style="list-style-type: none"> 惹きつけられるような話のリズムであり、強弱・緩急がある 声の大きさが適切で、明るく、聞き取りやすい <p>2. 導入時の態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 立居やふるまいが適切である 表情が豊かであり、目線が教室全体に行き渡っている <p>3. 導入時の授業運営</p> <ul style="list-style-type: none"> 特定の塾生の行動に流されず、教室全体を把握した授業を開始している 	<p>1. 展開時の話し方</p> <ul style="list-style-type: none"> 聞いていて苦にならない話のリズムである 声の大きさが適切で、間、明るさがあり、聞き取りやすい 要点の説明などが明確にわかるよう、話の強弱やスピードをコントロールしている <p>2. 展開時の態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 立居やふるまいが適切である 表情が豊かであり、目線が教室全体に行き渡っている。 <p>3. 板書による説明</p> <ul style="list-style-type: none"> 文字が塾生からよく見えて、目的に応じた板書をしている 長い時間、塾生に背を向けた板書をしていない 板書が授業の流れを妨げていない <p>4. 講師の意欲・情熱</p> <ul style="list-style-type: none"> 講師の意欲や情熱・使命感が伝わってくる <p>5. 展開時の授業運営</p> <ul style="list-style-type: none"> 特定の塾生の行動に流されず、教室全体を把握した授業をしている 常に授業に塾生の注意を向けさせる工夫をしている 	<p>1. まとめ時の話し方</p> <ul style="list-style-type: none"> 惹きつけられるような話のリズムであり、強弱・緩急がある 声の大きさが適切で、明るく、聞き取りやすい <p>2. まとめ時の態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 立居やふるまいが適切である 表情が豊かであり、目線が教室全体に行き渡っている <p>3. まとめ時の授業運営</p> <ul style="list-style-type: none"> 特定の塾生の行動に流されず、余裕を持って、教室全体を把握したまとめをしている

(4) スキルディクショナリ各ユニットの詳細

行動ユニットの番号とともに、行動基準策定の考え方を記載しています。

行動ユニットのタイミングと目的がどこに位置づけられるのかを図示しています

■行動ユニットI-A

【行動基準策定の考え方】

- 授業の初めに、授業内容に興味を持たせ、期待を抱かせることにより、積極的な授業参加を促すための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を始めるための行動	行動ユニットI-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を整理するための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)するための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
各2、3本までナシ。授業科目の知識/技能)			

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
<p>1. 授業の位置づけの明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> 本日の授業や当該単元で、何をやるのかを明確に説明している 前後の授業や他の単元などとの関わりを説明している 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の単元が学習事項の延長線上にあることを生徒に認識させるため、復習も兼ねて、必ず前回授業の要点を復習し、本日の授業との関わりを説明している。 本日の単元を理解することが、他の単元にどのような影響を与えるかを事前に説明することで、単元への興味を喚起している。
<p>2. 授業内容に興味を持たせる工夫(導入時)</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業内容について、整生に興味を持たせる工夫をしている 	<ul style="list-style-type: none"> 「この単元は〇〇校の入試でよく出るよ」など、その単元について、目標となる入試の重要性を説明している。 はじめに、生徒によって身近な事象や出来事などを拾い上げて、その単元との関わりを示して、興味を持ってもらうように工夫している。

求められる行動基準を記載しています。
これらが、学習塾講師に共通して求められる「行動基準」です。

行動基準の表現方法は多様です。
ここでは参考として、ベテラン講師などの行動事例を挙げています。

これらを参考に、あなたなりの工夫をして、表現してみてください。

① 導入

■行動ユニット1-A

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業の初めに、授業内容に興味を持たせ、期待を抱かせることにより、積極的な授業参加を促すための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)			

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
<p>1. 授業の位置づけの明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 当該単元や本日の授業で、何をやるのかを明確に説明している ・ 前後の授業や他の単元などとの関わりを説明している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の単元が既習事項の延長線上にあることを生徒に認識させるため、復習も兼ねて、必ず前回授業の要点を復習し、本日の授業との関わりを説明している。 ・ 本日の単元を理解することが、他の単元にどのような影響を与えるかを事前に説明することで、単元への興味を喚起している。
<p>2. 授業内容に興味を持たせる工夫(導入時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業内容について、塾生に興味を持たせる工夫をしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ はじめに、生徒にとって身近な事象や出来事などを拾い上げて、その単元との関わりを示して、興味を持ってもらうように工夫している。 ・ 「この単元は〇〇校の入試でよく出るよ」など、その単元について、目標となる入試での重要性を説明している。

■行動ユニット I - B

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業の初めに、授業目的や要素の関係性を考えさせ、その後の理解を促すための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
	総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)		

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
1. 導入時の説明・発問のタイミング <ul style="list-style-type: none"> ・ 最初の説明や発問のタイミングが適切であり、円滑な授業の展開を導いている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講師の側から答えや例を出すだけでなく、なるべく生徒に発言してもらっている。導入時に特にそれを意識することによって、生徒の参加意識を促している。 ・ 特に最初の発問は特に、生徒の理解度を確認し、授業の難易度のレベルを調整するようにしている。
2. 導入時の説明・発問の内容 <ul style="list-style-type: none"> ・ 最初の説明や発問は、適切な題材を用いて、塾生にわかりやすく問いかけている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 説明をする際に身近な事例を子どもから拾い上げて説明している。例えば、数学で立体を説明するときは、予め画用紙などで小道具を作成しておくことにしている。 ・ 最初の説明や発問は原則を重んじたシンプルなものにしている。例外をごちゃごちゃと説明すると、生徒が混乱する。 ・ 「これからやることは、決して難しくない」ということを感じてもらうために、単元の内容を「要はこういうことなんだよ」とかみ砕いて説明し、リラックスさせて授業を始めている。

■行動ユニット1-C

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業の初めにけじめをつけ、集団における講師のリーダーシップを発揮し、円滑な授業運営をするための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)			

求められる行動基準	(参考)ベテラン講師などの行動事例
1. 導入時の話し方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 惹きつけられるような話のリズムであり、強弱・緩急がある ・ 声の大きさが適切で、明るく、聞き取りやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 元気がない小さな声が最も良くないが、大きすぎる声も状況によっては問題である。最低限、一番後ろの生徒にも聞こえるような声の大きさは必要である。聞き取りやすく話しているかどうかは、生徒の表情をみて確認する努力をしている。 ・ 「えー、あー、うー」といった余計な言葉を使わない。言葉を咬まないようにしている。授業前に「滑舌」をして、生徒に聞きやすい発音を心がけている。
2. 導入時の態度 <ul style="list-style-type: none"> ・ 立居やふるまいが適切である ・ 表情が豊かであり、目線が教室全体に行き渡っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 立ち位置を正面中央にして、半歩前に出るつもりで話し始める。 ・ 導入時に、すぐ黒板に向かうのではなく、生徒を引き込むような元気な姿勢を見せている。 ・ 使用するテキストを高く掲げて、何を準備すべきか生徒に分かるようにしている。 ・ いつまでもおしゃべりしたりして集中しない生徒には、はじめに目線で注意し、それでもだめなら言葉で注意するようにしている。
3. 導入時の授業運営 <ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の塾生の行動に流されず、教室全体を把握した授業を開始している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「起立・礼・着席」の号令を行うことでメリハリをつけている。 ・ 授業で不必要な鞆や道具は、机の下に置かせてから授業を始めている。 ・ 遅れてきた生徒がいる場合は、指示(テキストの該当箇所など)をした上で、すぐに座らせている。 ・ 授業開始前の生徒の表情・会話に気を配っておき、学校での話題などからはじめることで授業をスムーズにスタートさせている。 ・ 「では、ノートを開いて」「ではプリントを表にして」というように、号令で生徒の行動が一斉に揃うようにしている。 <p>出席の状況をチェックして、欠席者のフォローに配慮している。</p>

② 展開（演習）

■行動ユニットII-A

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業内容が楽しく、役に立つこと実感させることによって、積極的な授業参加を促すための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)			

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
<p>1. 授業内容に興味を持たせる工夫（展開時）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて、授業内容について、塾生に興味を持たせる工夫をしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な話題を結びつけることでストーリー仕立ての説明をし、生徒の理解を促し、記憶に残るように話している。 ・ 解かせ終えた問題について、「実は〇〇校の入試に出た問題だ」などと、敢えて後で説明を加えることによって、インパクトを与えるとともに、入試問題が解けたという生徒の自信にも繋げる工夫をしている。
<p>2. 授業中の激励など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 塾生の反応をみて、励ましの言葉ややる気を喚起させる言葉をかけている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒がわかった瞬間、問題を解いた瞬間に、個別に激励することを心掛けている。生徒に自信を持たせ、やる気を喚起させるようにしている。 ・ 生徒が疲れているようなときは、1問ずつ「問題演習→解説」を繰り返すことでリズムをつけるような工夫をしている。集中力が切れやすい生徒には積極的に質問・激励をしている。 ・ 激励の言葉ややる気を喚起させる言葉は、生徒一律ではいけないし、繰り返してもいけない。状況に応じて言葉を発し、生徒のやる気を喚起したか確認することが必要である。

■行動ユニットII-B

【行動基準策定の考え方】

- ・ わかりやすく教え、考えさせることによって、到達（成長）を実感し、一層の理解を促すための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)			

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
1. 適切な説明・発問・例示 <ul style="list-style-type: none"> • 例示や発問の回数・タイミングが適切である • 塾生の理解の定着を図るために、工夫された説明・発問・例示がある 	<ul style="list-style-type: none"> • 暗記事項では声に出して覚えさせるなど、生徒に飽きさせず、理解を促す工夫をしている。また、暗記法を教えるようにもしている。例えば親鸞の「鸞」は何度書いても覚え難いが「糸糸言う鳥」と教えてあげることによって覚えられようになる。 • 生徒の集中力がきれてきているときには、問題を1問ずつ解かせるなど、発問を工夫することでリズム感を持たせている • 生徒が自分の力で考えられるような例題を出したり、前の例題で用いた解法を次の例題でも活用できることを示すなど、例題の組み立て方を工夫している。 • 時間を区切って問題を解かせることで、生徒に緊張感を持たせている
2. 塾生の理解確認 <ul style="list-style-type: none"> • 塾生の理解度をチェックするための発問をしている • 塾生の表情や応答などから理解度を解釈し、確認している 	<ul style="list-style-type: none"> • 選択問題であっても、単に答えあわせをするだけでなく、不正解の選択肢がなぜ間違っているのかを生徒に答えさせることで、理解を確認している。 • 問題の内容、難易度によって、チェックすべき生徒を選んでいる。難しすぎるようであれば再度説明をしている。 • 生徒が黒板を写している間に、教室を回ってノートに誤字脱字がないかをチェックしている。

<p>3. 説明、発問・確認・対応の流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> • 塾生の理解を促すための発問・確認・対応の流れが適切である • 特に授業の要点などが明確にわかるように説明している 	<ul style="list-style-type: none"> • 基本的には、その授業の中ですべてのコンテンツを完結させる。自宅で復習はしなくともよいレベルまで、授業のなかで理解させることを目指している。 • 発問から確認、対応の流れは、問題の難易度に応じて変化させている。説明・発問→確認→対応の流れは、一つの授業で何度も繰り返されるが、一連の流れが明確になるように、切替を重視している。
<p>4. 塾生の応答に対する対応</p> <ul style="list-style-type: none"> • 塾生の応答に対するリアクションが適切である • 塾生に確認したことを活かした説明ができている 	<ul style="list-style-type: none"> • レベルの高い生徒には発展的な問題にも取り組ませるなど、生徒のレベルの違いに配慮している。解答できなさそうな生徒には、ヒントなどを出して自分で答えさせるような工夫も必要である。 • 正答できなかった生徒に対するフォローを忘れないようにしている。間違っただけの解答をした生徒をそのままにしておく、その生徒はその後出席しづらくなったり、その後答えなくなったりする。 • 生徒が理解しているかどうかを確認し、理解していないと感じた場合は、説明方法を変えたりするなどして、理解の定着を促すようにしている。

■行動ユニットII-C

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業中、時間と空間をコントロールし、円滑な授業運営を維持するための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)			

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
1. 展開時の話し方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 聞いていて苦にならない話のリズムである ・ 声の大きさが適切で、間、明るさがあって、聞き取りやすい ・ 要点の説明などが明確にわかるよう、話の強弱やスピードをコントロールしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 元気のない小さな声が良くない。最低限、一番後ろの生徒にも聞こえるような声の大きさは必要である。聞こえているかどうかは、生徒の表情をみて確認している。 ・ ゆっくりと話した直後に急展開したり、敢えて急に小さな声で興味を惹きつけたりしている。生徒にはずっと緊張させても良くないし、ずっとリラックスさせても良くない。 ・ 集中させたい箇所や重要な箇所では、声の強弱やトーンを変えたり、間を取ったりするなど、注意を向けさせる工夫をする ・ 生徒たちが理解しているかをきちんと把握しながら、話の間やテンポを変えていく。生徒が真剣に聞き入っている状況が明らかであれば早口の方が集中してきくことにつながる。逆に理解度が低そうだと思うのであれば、同じ内容をゆっくり話したりする工夫をしている。
2. 展開時の態度 <ul style="list-style-type: none"> ・ 立居やふるまいが適切である ・ 表情が豊かであり、目線が教室全体に行き渡っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人(全員)と目が合うように意識しており、どうしても目が合わない生徒に話しかけたりしている。 ・ 生徒の集中力が切れるのを避けるため、時には教室内を歩き回りながら説明している。 ・ 生徒と正対していることが基本であるが、時には注意を引くために敢えて生徒の後ろで説明をしたりしている。

<p>3. 板書による説明</p> <ul style="list-style-type: none"> • 文字が塾生からよく見えて、目的に応じた板書をしている • 長い時間、塾生に背を向けた板書をしていない • 板書が授業の流れを妨げていない 	<ul style="list-style-type: none"> • 右端の生徒、左端の生徒、後方の生徒、全ての生徒が黒板の内容を読めるのかどうかを、書いている最中も、書き終えたときも意識している。 • ノートをとってもらうためにきれいにまとめる板書と、単元の概要を理解してもらうために大まかに書く板書など、目的に応じた板書の使い方をしている。また、「ここはノートに取ること」「ノートには取らないで、こっちをみること」と明確な指示を出している。 • ノートにとってもらうためにまとめる板書は、そのまま写せばノートになるような板書にしている。 • 生徒に要点を理解してもらうために、重要な箇所で色を変えたり、大きく書くなどの工夫をしている。 • 板書をしている間にも、生徒のほうに注意を向けるよう配慮している。例えば、生徒の話し声がした場合はふりかえったり、板書しながらも声を出すなど、状況と目的に応じた対応をとっている。
<p>4. 講師の意欲・情熱</p> <ul style="list-style-type: none"> • 講師の意欲や情熱・使命感が伝わってくる 	<ul style="list-style-type: none"> • 多少演技染みたふるまいであっても、説明をするときには、身振り手振りを加え、メリハリをつけることで生徒に情熱を伝えるような努力をしている。 • 講師が一人で演じ、生徒がボカンと眺めている授業が最も良くない。意欲や情熱は表現する努力をしても、常にそれが生徒に伝わっているかどうか、生徒の目が常に自分を集中して見ているかどうかを確認している。 • 講師は常に生徒に見られていることを意識し、規範を示すことが必要である。講師の言うことはふれないという意識を生徒に持たせて、信頼を得るよう努力している。

<p>5. 展開時の授業運営</p> <ul style="list-style-type: none"> • 特定の塾生の行動に流されず、教室全体を把握した授業をしている • 常に授業に塾生の注意を向けさせる工夫をしている 	<ul style="list-style-type: none"> • すべての生徒の挙動を観察するよう努力し、生徒には「自分は見られている」という感覚を持たせるようにしている。 • 常に黒板の前に立っているのではなく、教室の中心まで移動して、後ろの生徒に質問するような工夫もしている。横の動きだけだと特定の生徒にとって死角になる場合がある。 • 発問をする際には、敢えて最も後方の生徒にあてたり、講師が一番後ろに行って、最も前方の生徒にあてたり、隅にいるときは教室の対角線上にいる生徒にあてるようにしている。教室にいる生徒全体を間にしてやりとりがなされるため、皆が聞き取りやすく、参加意識を促せる。 • やる気のない生徒や、授業運営に支障をきたすようなふるまいをする生徒には、叱りつけることも時には必要だが、生徒のパーソナリティについて叱ってはいけない。生徒自身を叱るのではなくて、生徒の行動を叱り、しかもそれは公平でなくてはならない。
--	--

③ まとめ

<p>■行動ユニットⅢ－A</p> <p>【行動基準策定の考え方】</p> <p>・ 授業後も、塾生が興味を失わずに、継続的に学習をさせるための行動</p>		1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
	A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1－A	行動ユニット2－A	行動ユニット3－A
	B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1－B	行動ユニット2－B	行動ユニット3－B
	C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1－C	行動ユニット2－C	行動ユニット3－C
		総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)		

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
<p>1. 授業の位置づけの再確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 本日の授業や当該単元では何をしたのかを説明している 前後の授業や他の単元との関わりを説明している 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の単元が既習事項の延長線上にあることを生徒に再認識させるため、復習も兼ねて前回授業との関わりを説明している。 授業がどうしても次回に続きそうな場合は、面白くなりそうなところであえて終わりにし、次回への繋がりを重視し、興味を持続させるような工夫をするときもある。
<p>2. 授業内容に興味を持たせる工夫(まとめ時)</p> <ul style="list-style-type: none"> 本日の授業内容について、塾生の復習や次の学習を促す工夫をしている 	<ul style="list-style-type: none"> これだけは覚えて帰ってほしい、という本日のポイントを示し、なぜそれがポイントなのかも併せて説明している。例えば、「今後の理解の上で大事だ」「テストに出る可能性が高い」等、説明の方法は様々ある。 家に帰ってからも続けて学習しようとする意欲を高めるために、授業でやった内容と宿題をリンクさせるようにしている。

■行動ユニットⅢ－B

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業内容の理解、記憶の定着を促すための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
	総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)		

求められる行動基準	(参考)ベテラン講師などの行動事例
1. 塾生の理解確認 <ul style="list-style-type: none"> ・ 塾生の理解度をなんらかの方法で最終確認している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 確認テストなどをして、生徒の理解度をチェックするようにしている。 ・ 宿題を忘れずにメモしているか確認している。 ・ 重要事項は、声に出させて確認させている。
2. 要点の明示 <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の要点などが明確にわかるように再度説明している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当該単元における必修事項は、授業の最後に必ず確認している。

■行動ユニットⅢ－C

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業の終わりにけじめをつけ、塾生の授業参加に感謝するための行動

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)			

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
1. まとめ時の話し方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 惹きつけられるような話のリズムであり、強弱・緩急がある ・ 声の大きさが適切で、明るく、聞き取りやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の終盤では、授業の中盤と比べて「ゆっくり」「大きめの声で」ポイントを言うことにしている。 ・ 一つ一つのポイント毎に、多少の間を置き、メリハリの効いた話し方を心がけている。
2. まとめ時の態度 <ul style="list-style-type: none"> ・ 立居やふるまいが適切である ・ 表情が豊かであり、目線が教室全体に行き渡っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ まとめ時も、アイコンタクトで生徒一人一人と目が合うように意識しており、どうしても目が合わない生徒には話しかけたりしている。 ・ 自分がそわそわしたり、終わりの支度をしながら話したりしないで、最後まで生徒に集中するよう注意している。 ・ 「きょうは、どうしてもこれを教えたい」という姿勢を見せる工夫をしている。
3. まとめ時の授業運営 <ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の塾生の行動に流されず、余裕を持って、教室全体を把握したまとめをしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業で不必要な鞆や道具は、授業が終わるまで出させないし、帰り支度はしないように注意している。 ・ 次回の変更や注意点は、口頭ではなく、必ず板書にして連絡をしている。 ・ 生徒に「きょうは来て良かった」と思わせる工夫をするよう心掛けている。 ・ 「起立・礼・着席」の号令を行うことでメリハリをつけている。 ・ 生徒全員が退室するまで教室に留まり、質問に回答したり、生徒に声がけをしている

■授業科目の知識、基本的マナー、総合評価（共通）

【行動基準策定の考え方】

- ・ 授業計画等とも照らし合わせ、全体の構成が適切で効果的であり、基本的なマナーや授業科目の知識も備わっている

	1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A	行動ユニット2-A	行動ユニット3-A
B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B	行動ユニット2-B	行動ユニット3-B
C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C	行動ユニット2-C	行動ユニット3-C
総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)			

求められる行動基準	(参考) ベテラン講師などの行動事例
<p>1. 総合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の計画と全体の構成が適切である ・ 教室全体を掌握し、効果的な学習指導ができている塾生から学習塾講師として高い信頼を得ている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的に応じた内容を、授業全体を通じてバランスよく扱うようにしている。 ・ 授業の実施計画を予め設定し、時間内で全てを完結するように心掛けているが、生徒の理解度や反応をみて、臨機応変に対応することも併せて重視している。 ・ 授業のテクニックには様々なものがあるが、短期間に同じテクニックを繰り返し使わないように気をつけている。 ・ 全ての生徒に目を合わせることで、生徒の集中力を取り戻すことも可能である。それによって生徒も「先生が自分を意識・認識している」と感じる事が出来るため、信頼感も増す。
<p>2. 基本的マナー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 不適切な言葉づかいをしていない ・ 身だしなみ、態度が適切である 	<ul style="list-style-type: none"> ・ マナーや身だしなみについては、保護者に見られたときに信頼を得られるかを基準としている。茶髪やピアス、ジーンズなどを一律に禁止することはないが、「保護者に見られたときに信頼を得られるか」を基準として設定していれば、茶髪やピアスなどは自ずと無くなると考えている。 ・ 口調を「ですます」に限定しないが、あまり生徒の側に立った口調は慎むようにしている。品性のない態度や下品な話題など、社会人として相応しくない言動はしないようにしている。 ・ 感情的に怒るのは厳禁である。

3. 授業内容

- 授業科目の知識をしっかりと有しており、授業内容に誤りがない

- テキストの正解は、必ず自分で確認するようにしている。また、別の解き方や考え方がないかを確認するのを楽しんでいる。
 - 内容に関連する雑学を集め、授業で活かすようにしている。

2. 学習塾講師自習用DVD

(1) 作成のコンセプト

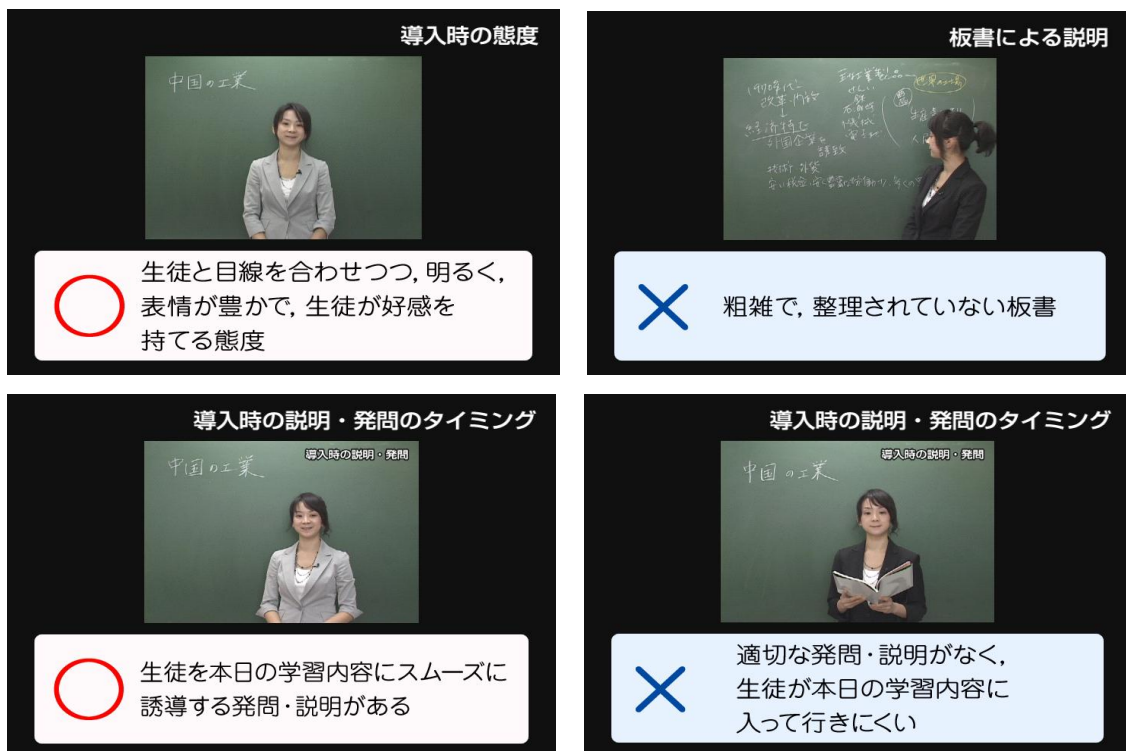
スキルディクショナリだけではわかりにくい部分について、具体的な例を映像によって視覚的に提示することにより、受験希望者が試験の趣旨をより正確に理解し、また自らの現状に照らして指針とすることを目的とする。

そのため、構成はスキルディクショナリに対応した構成になっている。

(2) 映像イメージ

スキルディクショナリの行動基準について、良い事例と悪い事例を対比させながら映像で説明することによって、塾講師の理解・習得を促している。

図表Ⅲ-1 実際のDVD映像イメージ



IV. 検定試験制度の評価方法・配点について

検定試験における評価方法・配点については、スキルディクショナリの内容などを反映し、実証実験を経て、以下の通り新たに設定している。

1. 評価項目・チェックシートの構成と一覧

評価項目・チェックシートは、学習塾講師が授業を行う際に実施すべき行動（＝評価項目）を、『授業の流れ』＜横軸＞と『講師の塾生に対する行動目的』＜縦軸＞とで構成した“3行×3列＋共通1行”のマトリクス上で表現している。

本検定制度では、受験者である学習塾講師の授業を模擬授業映像データを通じて、それぞれの行動（＝評価項目）の良し悪しについて審査員が採点することにより、受験者の合否を判断するものである。

- ◇＜横軸＞ 授業の流れ ＝「導入」→「展開」→「まとめ」の流れ。
- ◇＜縦軸＞ 講師の塾生に対する行動目的 ＝「学習を動機づけ」「授業に集中させる」こと。その結果「学習内容を理解させる」こと。
- ◇＜共通＞ 総合評価、基本的マナー、授業科目の知識 / 等。

図表IV-1 評価項目・チェックシートの構成と一覧

		授業の流れ		
		1. 導入	2. 展開(演習)	3. まとめ
各段階で望まれる行動	A. 学習を動機づけるための行動	行動ユニット1-A ▶ 授業の初めに、授業内容に興味を持たせ、期待を抱かせることにより、積極的な授業参加を促すための行動	行動ユニット2-A ▶ 授業内容が楽しく、役に立つことを実感させることによって、積極的な授業参加を促すための行動	行動ユニット3-A ▶ 授業後も、塾生が興味を失わずに、継続的に学習をさせるための行動
	B. 学習内容を理解させるための行動	行動ユニット1-B ▶ 授業の初めに、授業目的や要素の関係性を考えさせ、その後の理解を促すための行動	行動ユニット2-B ▶ わかりやすく教え、考えさせることによって、到達(成長)を実感させ、より一層の理解を促すための行動	行動ユニット3-B ▶ 授業内容の理解、記憶の定着を促すための行動
	C. 授業に集中(参加)させるための行動	行動ユニット1-C ▶ 授業の初めロジックをつけ、集団におけるリーダーシップを発揮し、円滑な授業運営をするための行動	行動ユニット2-C ▶ 授業中、時間と空間をコントロールし、円滑な授業運営を維持するための行動	行動ユニット3-C ▶ 授業の終わりロジックをつけ、塾生の授業参加に感謝するための行動
		総合、基本的マナー、授業科目の知識(共通)		

2. 集団指導 2 級について

(1) 集団指導 2 級の評価チェックシート・配点 (80 点満点)

集団指導 2 級の評価チェックシート (評価項目) 及び配点は以下の通りである。

評価に際しては、「有無法」もしくは「減点法」のネガティブチェックにより、採点を行う³。

満点

80

 点

1. 導入		22		
		問 題	や や 問 題	基 本 水 準
A 学習を動機づけるための行動				
1. 授業の位置づけの明確化				
・本日の授業 (単元) は何をやるのかを説明していない		0	-	4
・当該単元と他の単元との関わりを説明していない				
2. 授業の初めに当該単元に興味を持たせる工夫				
・当該単元について、生徒の興味を持たせる工夫をしていない		0	-	2
B 学習内容を理解させるための行動				
1. 導入時の説明・発問のタイミング				
・最初の説明や発問が、円滑な授業の展開を導くために不適切なタイミングである		0	-	3
2. 導入時の説明・発問の内容				
・最初の説明や発問で、わかりやすい説明ができていない		0	-	3
C 授業に集中 (参加) させるための行動				
1. 導入時の話し声				
・惹きつけられない話のリズム・強弱・緩急である		0	3	6
・一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである				
2. 導入時の態度				
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、情報伝達を促していない		0	2	4

³ 具体的な採点の方法は後述。

II. 展開（演習）	29	点
-------------------	-----------	----------

	問 題	や や 問 題	基 本 水 準
A 学習を動機づけるための行動			
1. 当該単元に興味を持たせるための工夫（展開時）			
・当該授業内容について、生徒の興味を持たせる工夫をしていない	0	-	4

B 学習内容を理解させるための行動			
1. 適切な説明・発問・例示			
・例示や発問の回数・タイミングが適切でない ・生徒の理解の定着を図るために工夫された説明、発問がない	0	-	3
2. 生徒の理解確認			
・生徒の理解度をチェックするための発問をしていない ・対象者の表情や姿勢、応答などから理解度を解釈し、確認していない	0	-	3
3. 説明、発問・確認・対応の流れ			
・発問・確認・対応の流れが理解を促すために適切でない ・特に授業の要点などが明確にわかるように説明していない	0	-	3

C 授業に集中（参加）させるための行動			
1. 展開時の話し声			
・聞いていて苦になるような話のリズム・緩急でなる ・一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである ・要点の説明時などが明確にわかるよう、話の強弱とスピードをコントロールしていない	0	2	4
2. 展開時の態度			
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、情報伝達を促していない	0	2	4
3. 板書による説明			
・文字がよく見えず、目的に応じた板書の活用に配慮していない ・極端に長文の板書、極端に長時間背を向けた板書をしている	0	2	4
4. 講師の意欲・情熱			
・講師の意欲や情熱・使命感が、生徒に伝わっていないと思われる	0	2	4

III. まとめ	13	点
-----------------	-----------	----------

	問 題	や や 問 題	基 本 水 準
A 学習を動機づけるための行動			
1. 授業の位置づけの再確認			
・本日の授業（単元）は何をしたのかを説明していない ・当該単元と他の単元との関わりを説明していない	0	-	2
2. 当該単元に興味を持たせる工夫（まとめ時）			
・当該単元について、生徒の復習や次の予習を促す工夫をしていない	0	-	2
B 学習内容を理解させるための行動			
1. 生徒の理解確認			
・生徒の理解度をなんらかの方法で最終確認していない	0	-	2
2. 要点の明示			
・授業の要点などを再度説明していない	0	-	3
C 授業に集中（参加）させるための行動			
1. まとめ時の話し声			
・最後まで惹きつけられない話のリズム・強弱・緩急である ・一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである	0	1	2
2. まとめ時の態度			
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、気持ちの良いまとめを促していない	0	1	2

授業科目の知識、基本的マナー、総合評価（共通）		16		
		問 題	や や 問 題	基 本 水 準
1. 総合				
<ul style="list-style-type: none"> ・授業全体の構成が不適切である ・教室全体を掌握せず、効果的な学習指導ができていない ・生徒から学習塾講師として信頼を得ていない 		0	4	8
2. 基本的マナー				
<ul style="list-style-type: none"> ・不適切な言葉づかいがある ・身だしなみ、態度が悪い 		0	2	4
3. 授業内容				
<ul style="list-style-type: none"> ・授業科目の知識を有しておらず、授業内容に誤りがある 		0	2	4

（２）集団指導 2 級の審査方法

① 採点方法

- それぞれの評価項目についての採点は、以下の 2 通り（有無法 or 減点法）のいずれかである。

◇ **有無法** 行動基準として記載されている具体的行動がなされたか、行動の『有無』で評価。

- a) 行った場合 x 点 = 「基本水準」レベル
 b) 行わなかった場合 0 点 = 「問題」レベル

- ◇ **減点法** 行動基準として記載されている具体的行動と照らし合わせて、問題なく行われているか、行動の『質をネガティブ』チェック。

【ピンク地】

※審査員は「基本水準」レベル<y 点>から採点をスタートし、

- a) 何ら問題がない場合 **y 点** = 「基本水準」レベル
- b) 何らかの問題がある場合（問題の程度に応じて以下のとおり減点）
 - －軽微な問題 **0.5y 点** = 「やや問題」レベル
 - －重篤・複数の問題 **0 点** = 「問題」レベル

減点法の例

	問題	やや問題	基本水準
○ 授業に集中（参加）させるための行動			
1. 導入時の話し声			
・ 惹きつけられない話のリズム・強弱・緩急である ・ 一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである	0	3	6
2. 導入時の態度			
・ 表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、情報伝達を促していない	0	2	4

「基本水準」レベルから採点をスタート。
何らかの問題があれば「やや問題」→「問題」へと減点。

② 審査体制

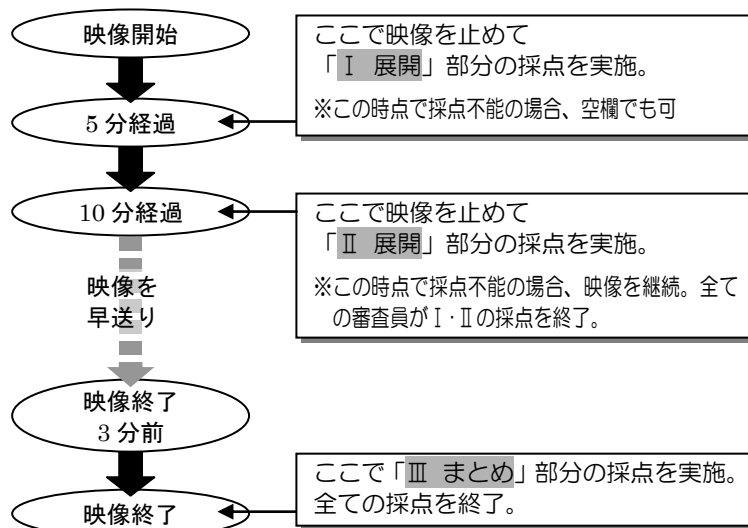
- 審査員 : 3 名
※文系科目・理系科目担当者を各 1 名以上含む
- 審査員資格 :
 - 一. 学習塾において 10 年以上の集団指導経験を有すること
 - 二. 社団法人全国学習塾協会支部関係者の推薦を受けていること

③ 審査手順

- 各審査員間による評価の「ブレ」が生じないように、審査開始前に合格ボーダーラインとなる講師の模擬授業映像データ（DVD）を確認し、採用基準の目安をつける。

a) 審査員 3 名が一堂に会し、模擬授業映像データを観ながら「評価チェックシート」を用いて採点を行う。なお、「Ⅰ 導入」「Ⅱ 展開」「Ⅲ まとめ」それぞれの採点を独立して行うべく、以下の手順により模擬授業映像データ (DVD) を適宜再生・停止しながら、段階を追って採点していく方法を採用する。

－ 「Ⅰ 導入」部分の採点は、模擬授業映像データ開始から 5 分経過時点で映像を止めて採点を行う。この時点で採点（判断）が不可能である場合はこの限りではない。全ての審査員が当該部分の採点を終えたら、模擬授業映像データの映像を再開する。



－ 「Ⅱ 展開」部分の採点は、模擬授業映像データ開始から 10 分経過時点で再度映像を止めて採点を行う。この時点で採点（判断）が不可能である場合は採点が可能となる時点まで映像をそのまま継続する。全ての審査員が当該部分（「Ⅰ 導入」部分も含め）の採点を終えたら、模擬授業終了 3 分前の時点まで映像を早送りする。

－ 「Ⅲ まとめ」部分の採点は、模擬授業映像データ終了 3 分前から終了時点までの映像を再生して採点を行う。

b) 受験者の担当科目に合わせ、これを専門とする審査員が「共通項目 3 授業内容」を判断し、この点数を他の審査員に伝達、審査員 3 名全員が同じ点数を記入する。

c) 審査員 3 名各自が総ポイントを算出するとともに、審査員コメントを記入する。なお、採点方法の違いによって評価項目毎のコメントの書き方を配慮する。

☆ 「減点法」による採点を行う評価項目 : 減点した箇所 (映像時間・行動等)、その判断理由について、極力コメントを記載

■2級の合格水準の考え方

- d) 審査員3名の総ポイントの合計点数が192点(80点満点×80%×3名)以上の場合は「合格」、192点未満の場合は「不合格」と判定する。
- e) ただし、合計点数が192点以上であっても、審査員のうち1名以上が64点を下回る採点を行った場合、審査員3名で協議の上、合否を判定する。
- 2級相当の学習塾講師としての「基本水準」を全て満たしていると評価されれば総ポイント80点(満点)がつくこととなり、この8割にあたる64点を合格点として設定する。
 - また、評価の公平性・客観性を保つためにも、合否の判定は審査員3名の総ポイントの合計によって行うことが望ましく、「64点×3名=192点」を合否判定ラインとする。
 - ただし、3名の審査員のうち1名でも7割(56点)に達していないと判断する審査員が存在するのであれば、そう判断するに至る理由等についての説明を得た上で、審査員3名による協議で合否を判定する。ただし、その協議の結果については、受験者に対して伝達するものとする。

3. 集団指導 1 級について

(1) 集団指導 1 級の評価チェックシート・配点 (150 点満点)

集団指導 1 級の評価チェックシート (評価項目) 及び配点は以下の通りである。

評価に際しては、「有無法」もしくは「減点法」のネガティブチェックと、「加点法」のポジティブチェックにより採点を行う⁴。

満点 **150** 点

1. 導入 **41** 点

	問 題	や や 問 題	基 本 水 準	十 分 充 足
A 学習を動機づけるための行動				
1. 授業の位置づけの明確化				
・本日の授業 (単元) は何をやるのかを説明していない	0	-	4	6
・当該単元と他の単元との関わりを説明していない				
・本日の授業 (単元) は何をやるのかを説明している				6
・当該単元と他の単元との関わりを説明している				
2. 授業の初めに当該単元に興味を持たせる工夫				
・当該単元について、生徒の興味を持たせる工夫をしていない	0	-	2	3
・当該単元について、生徒の興味を持たせる工夫をしている				
B 学習内容を理解させるための行動				
1. 導入時の説明・発問のタイミング				
・最初の説明や発問が、円滑な授業の展開を導くために不適切なタイミングである	0	-	3	4
・最初の説明や発問が、円滑な授業の展開を導くために適切なタイミングである				
2. 導入時の説明・発問の内容				
・最初の説明や発問で、わかりやすい説明ができていない	0	-	3	4
・最初の説明や発問は、適切な題材を用いて、わかりやすい説明ができています				
C 授業に集中 (参加) させるための行動				
1. 導入時の話し声				
・惹きつけられない話のリズム・強弱・緩急である	0	3	6	9
・一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである				
・惹きつけられるような話のリズム・強弱・緩急である				9
・一般的に聞き取りやすい声の大小、間、明るさである				
2. 導入時の態度				
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、情報伝達を促していない	0	2	4	6
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感がなく、情報伝達を促している				
3. 導入時の授業運営				
・遅刻してきた生徒や雑談を止めない生徒など、特定の生徒に流され、教室全体を把握した授業を開始していない	0	-	6	9
・遅刻してきた生徒や雑談を止めない生徒など、特定の生徒に流されず、教室全体を把握した授業を開始している				

⁴ 具体的な採点の方法は後述。

II. 展開（演習）

62 点

	問 題	やや 問題	基本 水準	十分 充足
A 学習を動機づけるための行動				
1. 当該単元に興味を持たせるための工夫（展開時）				
・当該授業内容について、生徒の興味を持たせる工夫をしていない	0	-	4	
・当該授業内容について、必要に応じて、生徒の興味を持たせる工夫をしている				6
2. 授業中の激励など				
・展開時に、生徒の反応をみず、励ましの言葉ややる気を喚起させる言葉をかけていない	0	-	4	
・展開時に、生徒の反応をみて、励ましの言葉ややる気を喚起させる言葉をかけている				6
B 学習内容を理解させるための行動				
1. 適切な説明・発問・例示				
・例示や発問の回数・タイミングが適切でない	0	-	3	
・生徒の理解の定着を図るために工夫された説明、発問がない				4
・例示や発問の回数・タイミングが適切である				
・生徒の理解の定着を図るために工夫された説明、発問がある				
2. 生徒の理解確認				
・生徒の理解度をチェックするための発問をしていない	0	-	3	
・対象者の表情や姿勢、応答などから理解度を解釈し、確認していない				5
・生徒の理解度をチェックするための発問をしている				
・対象者の表情や姿勢、応答などから理解度を解釈し、確認している				
3. 説明、発問・確認・対応の流れ				
・発問・確認・対応の流れが理解を促すために適切でない	0	-	3	
・特に授業の要点などが明確にわかるように説明していない				4
・発問・確認・対応の流れが理解を促すために適切である				
・特に授業の要点などが明確にわかるように説明している				
4. 生徒の応答に対する対応				
・生徒の応答に対するリアクションが適切でない	0	-	3	
・確認したことを活かした説明ができていない				4
・生徒の応答に対するリアクションが適切である				
・確認したことを活かした説明ができています				
C 授業に集中（参加）させるための行動				
1. 展開時の話し声				
・聞いていて苦になるような話のリズム・緩急でなる	0	2	4	
・一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである				6
・要点の説明時などが明確にわかるよう、話の強弱とスピードをコントロールしていない				
・聞いていて苦にならない話のリズム・緩急である				
・一般的に聞き取りやすい声の大小、間、明るさである				
・要点の説明時などが明確にわかるよう、話の強弱とスピードをコントロールしている				
2. 展開時の態度				
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、情報伝達を促していない	0	2	4	
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感がなく、情報伝達を促している				6
3. 板書による説明				
・文字がよく見えず、目的に応じた板書の活用に配慮していない	0	2	4	
・極端に長文の板書、極端に長時間背を向けた板書をしている				6
・文字がよく見えて、目的に応じた板書の活用に配慮している				
・極端に長文の板書、極端に長時間背を向けた板書をしていない				
4. 講師の意欲・情熱				
・講師の意欲や情熱・使命感が、生徒に伝わっていないと思われる	0	2	4	
・講師の意欲や情熱・使命感が、生徒に伝わっていると思われる				6
5. 展開時の授業運営				
・注意力が散漫な生徒や遅刻してきた生徒など、特定の生徒に流され、教室全体を把握した授業をしていない	0	-	6	
・飽きてきた生徒、ざわついている生徒を注意せず、再度集中させていない				9
・注意力が散漫な生徒や遅刻してきた生徒など、特定の生徒に流されず、教室全体を把握した授業をしている				
・飽きてきた生徒、ざわついている生徒を注意し、再度集中させている				

Ⅲ. まとめ

23 点

問 題	やや 問題	基本 水準	十分 充足
A 学習を動機づけるための行動			
1. 授業の位置づけの再確認			
・本日の授業（単元）は何をしたのかを説明していない ・当該単元と他の単元との関わりを説明していない	0	-	2
・本日の授業（単元）は何をしたのかを説明している ・当該単元と他の単元との関わりを説明している			
2. 当該単元に興味を持たせる工夫（まとめ時）			
・当該単元について、生徒の復習や次の予習を促す工夫をしていない	0	-	2
・当該単元について、生徒の復習や次の予習を促す工夫をしている			
B 学習内容を理解させるための行動			
1. 生徒の理解確認			
・生徒の理解度をなんらかの方法で最終確認していない	0	-	2
・生徒の理解度をなんらかの方法で最終確認している			
2. 要点の明示			
・授業の要点などを再度説明していない	0	-	3
・授業の要点などが明確にわかるように再度説明している			
C 授業に集中（参加）させるための行動			
1. まとめ時の話し声			
・最後まで惹きつけられない話のリズム・強弱・緩急である ・一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである	0	1	2
・最後まで惹きつけられるような話のリズム・強弱・緩急である ・一般的に聞き取りやすい声の大小、間、明るさである			
2. まとめ時の態度			
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、気持ちの良いまとめを促していない	0	1	2
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感がなく、気持ちの良いまとめを促している			
3. まとめ時の授業運営			
・終了前に退出しようとする生徒など、特定の生徒に流され、教室全体を把握した授業ができて	0	-	2
・終了前に退出しようとする生徒など、特定の生徒に流されず、教室全体を把握した授業をして			

授業科目の知識、基本的マナー、総合評価（共通）

24 点

問 題	やや 問題	基本 水準	十分 充足
1. 総合			
・授業全体の構成が不適切である ・教室全体を掌握せず、効果的な学習指導ができていない ・生徒から学習塾講師として信頼を得ていない	0	4	8
・授業全体の構成が適切である ・教室全体を掌握し、効果的な学習指導ができていない ・生徒から学習塾講師として高い信頼を得ている			
2. 基本的マナー			
・不適切な言葉づかいがある ・身だしなみ、態度が悪い	0	2	4
・不適切な言葉づかいがない ・身だしなみ、態度がよい			
3. 授業内容			
・授業科目の知識を有しておらず、授業内容に誤りがある	0	2	4
・授業科目の知識をしっかりと有しており、授業内容に誤りがない			

(2) 集団指導 1 級の審査方法

① 採点方法

- それぞれの評価項目についての採点は、2 級で用いた「有無法」 or 「減点法」に加え、1 級では「加点法」も採用されることになる。

◇ **有無法** 行動基準として記載されている具体的行動がなされたか、行動の『有無』で評価。

- | | | | |
|-------|-------------|-----|-------------|
| 【無 地】 | a) 行った場合 | x 点 | = 「基本水準」レベル |
| | b) 行わなかった場合 | 0 点 | = 「問 題」レベル |

◇ **減点法** 行動基準として記載されている具体的行動と照らし合わせて、問題なく行われているか、行動の『質をネガティブ』チェック。

※審査員は「基本水準」レベル<y 点>から採点をスタートし、

- | | | |
|------------------------------------|--------|-------------|
| a) 何ら問題がない場合 | y 点 | = 「基本水準」レベル |
| b) 何らかの問題がある場合 (問題の程度に応じて以下のとおり減点) | | |
| - 軽微な問題 | 0.5y 点 | = 「やや問題」レベル |
| - 重篤・複数の問題 | 0 点 | = 「問 題」レベル |

減点法の例

	問 題	やや 問 題	基本 水 準
C 授業に集中（参加）させるための行動			
1. 導入時の話し声			
・惹きつけられない話のリズム・強弱・緩急である ・一般的に聞き取りにくい声の大小、間、明るさである	0	3	6
2. 導入時の態度			
・表情、立居、ふるまい、目線、等に違和感があり、情報伝達を促していない	0	2	4

「基本水準」レベルから採点をスタート。
何らかの問題があれば「やや問題」→「問題」へと減点。

- さらに、1級に限っては上記の2通りの方法に加えて「加点法」を併用する。

◇ **加点法** 行動基準として記載されている具体的行動と照らし合わせて、うまく行われているか、行動の『質をポジティブ』チェック。

※審査員は、2級相当である「基本水準」レベル<z点>を想定しつつ、基本水準レベルを超えた1級講師にふさわしい行動を行っている場合には「十分充足」レベルとして加点。

「基本水準」レベル
評価できる場合に

② 審査体制

- 審査員 : 3名
※文系科目・理系科目担当者を各1名以上含む

● 審査員資格 :

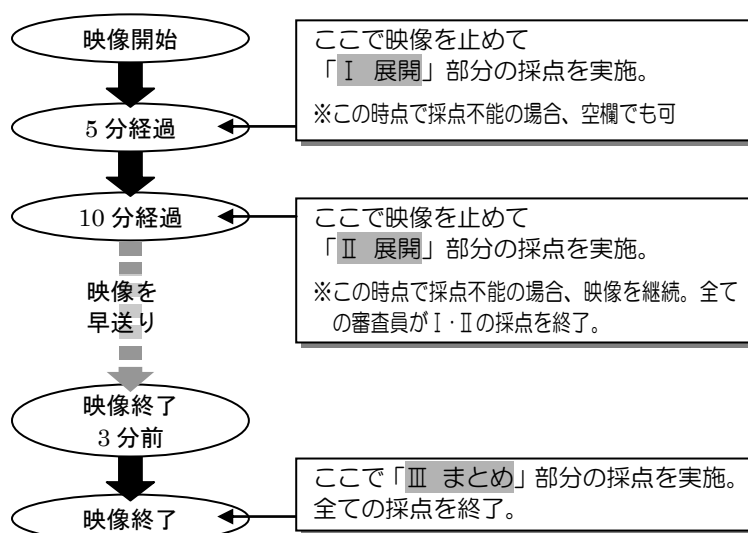
- 一. 学習塾において10年以上の集団指導かつ5年以上の個人指導経験を有していること。
- 二. 協会講師能力評価システム委員会から推薦を受けていること。
- 三. 集団指導1級及び個人指導1級の資格を有する者。ただし、理事会の承認を得ている者はこの限りではない。

③ 審査手順

- 各審査員間による評価の「ブレ」が生じないように、審査開始前に合格ボーダーラインとなる講師の模擬授業映像データ (DVD) を確認し、採用基準の目安をつける。

a) 審査員3名が一堂に会し、模擬授業映像データを観ながら「評価チェックシート」を用いて採点を行う。なお、「Ⅰ 導入」「Ⅱ 展開」「Ⅲ まとめ」それぞれの採点を独立して行うべく、以下の手順により模擬授業映像データ (DVD) を適宜再生・停止しながら、段階を追って採点していく方法を採用する。

— 「Ⅰ 導入」部分の採点は、模擬授業映像データ開始から5分経過時点で映像を止めて採点を行う。この時点で採点 (判断) が不可能である場合はこの限りではない。全ての審査員が当該部分の採点を終えたら、模擬授業映像データの映像を再開する。



- 「Ⅱ 展開」部分の採点は、模擬授業映像データ開始から10分経過時点で再度映像を止めて採点を行う。この時点で採点 (判断) が不可能である場合は採点が可能となる時点まで映像をそのまま継続する。全ての審査員が当該部分 (「Ⅰ 導入」部分も含め) の採点を終えたら、模擬授業終了3分前の時点まで映像を早送りする。
- 「Ⅲ まとめ」部分の採点は、模擬授業映像データ終了3分前から終了時点までの映像を再生して採点を行う。

- b) 受験者の担当科目に合わせ、これを専門とする審査員が「共通項目 3 授業内容」を判断し、この点数を他の審査員に伝達、審査員 3 名全員が同じ点数を記入する。
- c) 審査員 3 名各自が総ポイントを算出するとともに、審査員コメントを記入する。なお、採点方法の違いによって評価項目毎のコメントの書き方を配慮する。
- ◇ 「減点法」による採点を行う評価項目 : 減点した箇所 (映像時間・行動等)、その判断理由について、極力コメントを記載
 - ◇ 「加点法」による採点を行う評価項目 : 加点した箇所 (映像時間・行動等)、その判断理由について、極力コメントを記載

■1 級の合格水準の考え方

- d) 審査員 3 名の総ポイントの合計点数が 360 点 (150 点満点×80%×3 名) 以上の場合「合格」、360 点未満の場合は「不合格」と判定する。
- e) ただし、合計点数が 360 点以上であっても、審査員のうち 1 名以上が 120 点を下回る採点を行った場合、審査員 3 名で協議の上、合否を判定する。
- 1 級相当の学習塾講師として求められる行動基準の全てを満たしていると評価されれば、総ポイント 150 点 (満点) となる。この 8 割にあたる 120 点を合格点として設定する。
 - また、評価の公平性・客観性を保つためにも、合否の判定は審査員 3 名の総ポイントの合計によって行うことが望ましく、「120 点×3 名=360 点」を合否判定ラインとする。
 - ただし、3 名の審査員のうち 1 名でも 101 点 (基本水準を全て満たしたレベルの点数) に達していないと判断する審査員が存在するのであれば、そう判断するに至る理由等についての説明を得た上で、審査員 3 名による協議で合否を判定する。ただし、その協議の結果については、受験者に対して伝達するものとする。

V. 今後の普及策と更なる取組課題

1. 学習塾講師能力評価システムの普及策について

本年度事業の成果を、効果的に普及させるために、以下のような取り組みが必要となる。

(1) 広報活動について

- 全国の学習塾に広く活用してもらうため、協会の広報誌などを通じて、本システムのPRを行う。
- スキルディクショナリや自習用映像については、全国学習塾協会のホームページ上で閲覧・ダウンロードが可能な状態にし、塾講師にとってのアクセス性を高めておく。
- なお、広報の際には、誤解を招かないように、スキルディクショナリの性質や、検定試験の対象範囲・評価方法なども併せて正確に広報するものとしたい。
特に、検定試験では、学習塾講師の全能力を評価しているものではないことを明示し、その評価対象範囲を明示する。その評価方法についても公開して透明性を確保することが望ましい。

(2) スキルディクショナリの効果的な活用、更なる高度化について

- スキルディクショナリについては、協会主催のワークショップなどを開催して、現場での効果的な活用方法について意見交換を検討したり、実施されている効果的な活用策を集約し、業界全体で共有する予定。
- スキルディクショナリの「ベテラン講師などの行動事例」については、今後も全国の学習塾に事例提供を募り、協会データベース化する予定。そのデータベースを用いて汎用的な事例、個別特殊な事例を類型化しながら、スキルディクショナリの更なる充実を図る予定。

2. 今後の取り組み課題について

本年度事業の成果を、効果的に普及させるために、以下のような取り組みが必要となる。

(1) 集団指導 2 級の評価方法変更について

- 集団指導 2 級は、既に試験制度が運用されているため、その評価方法変更については、審査者及び受験者に対するの告知が必要となる。審査者研修会の開催や試験広報媒体での注意書きなど、迅速かつ徹底した対応が必要となる。

(2) 集団指導 1 級の立ち上げについて

- 次年度以降、集団指導 1 級についても運用がなされる予定だが、1 級については、ポジティブ評価が入るため、評価者の主観が入りやすくなる傾向にある。判断基準にブレがないように、念入りな事前の評価者研修（説明会）やトライアルが必要となる。
- また、事前のトライアル・意見収集によって、検定試験の方法（実際の授業を用いることが可能か、など）についても再度協会内で実現可能性や目的に即した実施方法を議論し、方向性を確定する必要がある。

(3) その他の取り組み課題

- 集団指導以外の能力開発システムについて（例えば、個別指導など）、その必要性と取組方策を検討する必要がある。

VI. 資料編（委員会名簿・議事概要）

1. 学習塾講師能力評価システムの高度化研究委員会 委員名簿

平成 20 年度 学習塾講師能力評価システムの高度化に係る研究委員会
委員名簿

(50 音順、敬称略)

<委員>

伊藤亜矢子	お茶の水女子大学大学院	准教授
伊藤 政倫	ケイエスケイ進学塾株式会社	代表取締役
稲葉 秀雄	株式会社日本私学通信社	代表取締役
大嶋 淳俊	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社	主任研究員
川合 正	京北高等学校	学校長
中萬 隆信	株式会社中萬学院	代表取締役
仲野十和田	有限会社十和田	代表取締役
藤澤 伸介	跡見学園女子大学 文学部	教授
山口 榮一	玉川大学 教育学部	教授
横田 保美	株式会社栄光 広報部	部長

<オブザーバー>

経済産業省 商務情報政策局 サービス産業課
株式会社 野村総合研究所

<事務局>

社団法人 全国学習塾協会
三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社

2. 学習塾講師能力評価システムの高度化研究委員会 議事概要

(1) 第1回研究委員会

平成20年度 学習塾講師能力評価システムの高度化に係る研究委員会

－ 第1回 －

日時：平成20年10月2日（木）10:00～12:00

場所：品川イーストワンタワー 21F 小会議室 I

1. 開会
2. 挨拶
3. 委員紹介
4. 委員長選任
5. 議題
 - (1) 学習塾講師集団指導1級・2級試験に係る経緯と課題
 - (2) 本年度事業の内容について
 - (3) 学習塾講師集団指導1級・2級試験の高度化に向けて
 - (4) スキルディクショナリのイメージについて
 - (5) 今後のスケジュールについて
6. 閉会

配付資料

- 資料1 委員名簿
- 資料2 学習塾講師集団指導1級・2級試験について（検討の経緯と現状の課題）
- 資料3 本年度の事業内容について
- 資料4 学習塾講師集団指導1級・2級試験の高度化に向けた改善点と方向性
- 資料5 学習塾講師のスキルディクショナリ（集団指導1級のイメージ）
- 資料6 今後のスケジュール（予定）

<議事概要>

出席者：

(委員)

山口委員長、伊藤亜矢子委員、伊藤政倫委員、稲葉委員、大嶋委員、川合委員、
中萬委員、仲野委員、藤澤委員、横田委員

(オブザーバー)

経済産業省 高野企画官、伊藤係長、馬田係員

野村総合研究所 武田副主任コンサルタント

(事務局)

社団法人 全国学習塾協会 大木氏

三菱UFJ リサーチ&コンサルティング 横山、豊島、高崎、小林

挨拶

(経済産業省 高野企画官よりご挨拶)

- ・ この研究会は学習塾業界に関するものだが、民間の教育サービスという観点から経済産業省が担当している。
- ・ サービス産業の質は人材の質で決まる側面があり、そのためにも人材の質の高度化が重要となる。しかし、人材の流動化が進んでいる中で、塾ごとに各々高度化を進めるだけでなく、業界として人材の質の向上に取り組んでいくことが必要であると考えている。
- ・ 検定試験の作成にあたっては、評価する側の視点だけでなく、評価される側の視点が大事であると考えている。この検定が塾講師のレベルアップに資するものとする事で、塾と講師に win-win の関係を構築できればと考えている。

(全国学習塾協会 伊藤会長よりご挨拶)

- ・ 日本の教育の力は技術力であり、日本の財産であると考えている。この財産を、今まではあまり意識しない形で先達から受け継いできたが、今後はそれを客観的に見える形で次の世代に伝達していきたいと考えている。
- ・ 世界に誇れる教育界のイチローを作りたいと思う。教育界で輝く人が輩出されるようにしていきたい。よろしくお願いします。

委員紹介

(事務局より委員の紹介)

委員長の選任

(山口委員長よりご挨拶)

- ・ 今まで2年間やってきた事業であり、私自身は一定の完成をみたと感じた時もあったが、受講者の立場で見た場合、より客観的で明確な判断基準が必要だと考えている。
- ・ 現在、大学の授業において昨年度までに作成した集団指導1級・2級のプログラムを使っているが、授業を評価する際にはどうしても私個人の思いが入ってしまい、評価が客観的かどうか難しいものもあった。
- ・ 本制度をよりよいものにしていくため、協力していきたいと思う。

議題

学習塾講師集団指導1級・2級試験に係る経緯と課題

(稲葉委員より資料2の説明)

- ・ 塾検定という仕組みを活用して、講師に必要な能力・スキルを整理することで、講師にどういった能力が求められるのかの啓蒙にもなると考えている。(山口委員長)
- ・ 教師を評価するときいつも問題になるのは、評価可能な部分のみが着目されてしまうことである。教室の状況に応じて柔軟に対処することなどは、客観的な評価が難しい。(藤澤委員)
- ・ 私は、厚生労働省で職業能力評価基準を作成した経験があるが、そこでは基準だけを作り、あとの部分は各社にお任せだったが、この検定では具体的に能力の部分にまで踏み込んでいる。評価の部分だけではスキル・能力として漏れてしまう項目もあると思うが、スキルディクショナリを示していくことで、自己啓発と検定を両立させて進めていけば、良いものができるのではないか。(大嶋委員)

本年度の事業内容について

(事務局より資料3の説明)

- ・ 集団指導の評価と個別指導の評価は異なると思う。学習塾は集団指導と個別指導が混在しているが、この検定ではそれらに共通したものを評価するという理解で良いのか。(藤澤委員)
- ・ この委員会は、一斉指導(集団指導)を対象としている。(山口委員長)

学習塾講師集団指導1級・2級の高度化に向けて

(事務局より資料4の説明)

- ・ 状況に応じた対応力についてもいろいろと議論があり、技の熟達のモデルというものがある。ドレフェスは技の熟達の5段階モデルを提唱しているが、そこでは技術を身につける際に、①状況に適応できない状況があり、②徐々に状況を理解・適応し、③一人前に振舞うという段階がある。次に、④それを変えていき、その上には⑤エキスパートになるとしている。この検定の対象はエキスパートやカリスマ講師ではないことを確認しておきたい。学校の教育現場でも、教師にはいろいろな能力があり、どういうスキルが

共通要素として存在しているかは十分認識されていない。学習塾業界からこういったものが提示されるのは社会的にも意義のあることではないか。(山口委員長)

- ・ 授業の評価は難しいが、塾は日常的に保護者や生徒から評価されているので、講師は保護者や生徒の目を常に気にしているだろう。そういった他者の評価も考慮してはどうか。(川合委員)
- ・ 第三者の他者評価をこの検定に含めると、評価の仕組みとしてのバランスが崩れてしまう。ここで評価しているのは、あくまでも塾講師として、保護者を納得させ、評価を得るといった講師の“営業力”は含まず、講師の“技術力”に焦点を絞っている。(横田委員)
- ・ この検定で1級を取ったからといって、塾講師自身が自分はスーパースター講師だと思ふようなことはあり得ない。1級を取ったからといっても、講師は常に保護者や生徒の目にさらされており、今年評判の良かった先生が来年も評判が良いかは分からない。(横田委員)
- ・ 今までの2年間の委員会を通じて、ある面では決定的に間違っていたと思うところがある。今までの委員会では、授業運営が形成できていれば2級の合格ラインだという前提があり、授業運営を司るための能力をリストアップしていった。しかしそもそも集団指導学習塾の視点を考えると、個別指導が増える中で、時代の流れとして集団指導のあり方は問われている。集団指導のメリットは、競争、刺激、活気、認知、評価(みんなの前で褒められることの喜び)等があげられるが、こうした集団指導のよさを活かした授業をできる講師が求められている。また、本来は、はじめに1級を作り検定の柱・核を構築した上で、それをもとに2級の到達基準を作るべきだったのではないか。さらに、塾経営者の視点で言えば、最低限の知識は学んでから入ってきて欲しい。その意味では、必要な知識を学ぶテキストのようなものがあるのは有効だと思う。いきなり実践力を見られるよりも、理解の土台の知識を身につけてもらって、その上で実践演習が有るべきである。(中萬委員)

スキルディクショナリのイメージについて

(事務局より資料5の説明)

スキルディクショナリ全体について

- ・ 経営者の立場としては、スキルディクショナリとしてここまで型にはめることにどこまで意味があるかという違和感を当初は覚えたが、先ほどの事務局説明で自動車運転免許の検定の例があったが、塾講師についてもそれと同じように型にはめて学んでいく部分と、実践の中で学んでいく部分があると感じている。全体としてはよく作成させていただいたと思う。この方針で進めて頂いて、おおむね結構だと思う。(中萬委員)
- ・ この検定を普及・推進をしている立場としては、塾経営者の多くは検定の趣旨についてまだ誤解がある。塾の経営者にこの検定のことをお話しすると、「1000の塾があるなら、

1000のやり方がある」という批判を受ける。先だって事故米の問題があったが、塾検定が「うちの塾では事故米はない」ことを示す最低限の基準であると説明すると、塾経営者も納得されることが多い。しかしこれだけ細かいスキルディクショナリを塾経営者に見せると、「また型にはめようとするのか」という意見は出るだろう。今後、塾経営者への説明の仕方も重要になってくると思う。(伊藤政倫委員)

- ご提示頂いたスキルディクショナリは非常に良くできている。我々の「痛いところ」も押さえていると感じる。しかし、問題点を3つ指摘させていただきたい。第1に審査の効率性である。この方法で審査すると時間がかかる。第2に、項目をブレイクダウンすることで独立性を高めるという意図はよく分かるが、例えば「明確に伝えるための行動」が、導入・展開・まとめのそれぞれの段階でどう違うのかをきちんと整理しておかないと、結局評価項目間で従属関係が生じてしまう。第3に、現場で教えている講師のほとんどが授業全体をひとつのものとして捉えており、細かくブレイクダウンして考えている訳ではない。そのため、このスキルディクショナリを塾講師としてのスキルだと示した場合、かえってわかりにくくなる恐れがある。その意味では昨年度の方がわかりやすいかもしれない。(横田委員)
- 第1に、本検定試験の対象が集団指導だとすると、教師はリーダーとしての素養を持たねばならない。リーダーの基本はパフォーマンス(目標追求行動)とメンテナンス(集団維持機能)だ。しかしここで提示されている行動は全てパフォーマンス(目標追求行動)である。例えば子どもたち全員に挨拶することや、元気がどうかの確認などメンテナンスに相当する行動が入っていない。第2に、子どもたちに学習の意義を分からせることが学習塾には絶対必要である。つまり、興味を持たせるだけでは弱くて、もっと勉強の必要性を認識させる必要がある。また、導入のところではモチベーションを高めて、展開のところで理解させ、といった形で、時期によって見るべきところを限定すれば、セル(評価項目)の数を減らせるため煩雑さも低減できるのではないか。第3に、授業全体を構造化(授業を「導入→展開→まとめ」というように組み立てる)する能力は絶対必要である。学校教師の場合、教育実習で指導案を書かせることで授業の構造化する能力を評価する。塾講師についても、授業を構造化できるかどうか確認することが必要である。導入とまとめをやらねばならないという感覚がなければならぬ。(藤澤委員)

運用上の課題と枠組み(導入→展開→まとめ)について

- このフレームだと最後まできちんとビデオを見ないと評価できないので、評価が大変になると言う運用上の危惧はある。(伊藤政倫委員)
- ビデオの時間を考えると、実務的には難しい面があるので検討が必要である。また項目間の採点ウエイトについても、今後考えていかなければいけない。(稲葉委員)
- 実際の授業で「導入」から「まとめ」までを撮影するなら、授業を1コマつぶすことになってしまう。塾経営者の立場から言って、それは不可能である。(横田委員)

- ・ スキルディクショナリに基づく評価システムを作ったとしても、それを運用で使えなければ意味はない。一点確認させていただきたいが、試験制度のスキーム（ビデオ時間等）を変更することは可能なのか。例えばビデオ時間を変更できるのか。（事務局豊島）
- ・ 皆さんの合意が得られれば可能だと思う。（稲葉委員）
- ・ 先ほど、ビデオを最後まで見るのは大変だというご指摘があったが、ビデオを最後まで見ていないのであれば、受験者に課した要件を見ていない、評価していないことになってしまい、それはそれで問題だと思う。評価方法を標準化することで人数を減らすようなことは可能だと思うが、運用上とのバランスは考えながら検討する必要がある。お示ししているスキルディクショナリは、あくまでたたき台であるので、先生方のご意見を頂きながら運用上のバランスも考慮してご検討頂きたい。（事務局豊島）
- ・ 試験運用上の実行可能性という視点が現在の検定試験のチェックリストに反映された面もある。ビデオを全部見ていないのではなくて、15分見れば全部分かるだろうという考え方だった。もし今回提示されたような枠組みで行くならば、評価のやり方も変わらざるを得ないだろう。もし一人あたり30分かかるとなると、難しい。（中萬委員）
- ・ 現在の評価の中には、まとめの部分が入っていない。授業の導入と展開の部分のみで審査するように出来ていた。だからはじめの10分だけで判断が出来た。（横田委員）
- ・ 評価者はプロなので、少し見れば良い教師かどうかは分かってしまうということがあった。（山口委員長）
- ・ 現状のビデオ撮影時間10～15分間では「まとめ」まで進まない。（中萬委員）
- ・ しかし、こういった要素を踏まえなければ、型無し（導入→展開→まとめといった型のない）の教師になってしまう。（山口委員長）
- ・ 授業時間の中で、ひとつのことをずっと教えているわけではなく、1回の授業の中で複数のテーマを扱うこともある。例えば足し算を教えるだけでも、導入→展開→まとめがある。テーマによっては、10～15分でひとつのテーマの、導入→展開→まとめの評価は出来る。（伊藤政倫委員）

生徒のモチベーションの向上について

- ・ 「なぜ勉強することが重要なのか」を教えることについては、塾全体の仕組みの中でも行っている。個々の授業の中で毎回教えてはいないのが実情である。（横田委員）
- ・ なぜ勉強するのか、勉強したらどうなるのかを分からせることが塾の塾たる所以である。しかし最近の塾の動向を見ると、勉強の必要性を認識させることはかなり早い段階で行われることも多い。合宿などを行って、学習意欲向上のための時間を設けることがある。このように塾全体の仕組みの中で取り組むことはあっても、毎回の授業でモチベーションを高めることはしていないケースもある。（中萬委員）
- ・ 塾が全体の仕組みの中でモチベーションを高める努力をしていることは分かるが、個々の授業が全体の中でどうつながっているかを確認することが必要である。（藤澤委員）

その他

- ・ 2級のビデオを見ていて、実際に生徒がいないとモチベーションの評価は難しいと感じた。(仲野委員)
- ・ このスキルディクショナリは、項目を独立にしたことで情報量が多くて煩雑という面はあるが、一方で、1つ1つの要素を“技”と捉え、個々を鍛えていくことが可能になるという意味では、スキルを明確化出来ている面もある。(山口委員長)
- ・ パフォーマンスとメンテナンスについてだが、理解をさせたり、やる気を起こさせることによってメンテナンスされる部分もあり、両者を明確に区別することは難しいかもしれない。(山口委員長)
- ・ 教育実習を考えると連想したが、重要なのはプレゼンテーション能力よりもコミュニケーション能力ではないか。生徒の発言をどのように拾ったかなどのコミュニケーション能力に関する項目をもっと入れて、評価してはどうか。導入→展開→まとめという流れは非常によく整理されていると思う。(川合委員)
- ・ 必ずしもスキルディクショナリ全体を検定試験に適用する必要はない。検定試験では必要な項目だけを抽出し、評価すれば良いと思う。これはあくまでもスキルディクショナリなので、必要度をふまえて全体の構成をしていけば、有用なものになるのではないか。また、試験を受けた人たちの次の能力開発・自己啓発に、スキルディクショナリを活用できれば良いと思う。(大嶋委員)
- ・ スキルディクショナリを評価基準のデータベースとして用いれば、受講者に対するメッセージにもなるので良いのではないかと思う。あとは、短い時間の中でスキルディクショナリをどのようにしてより良いものにしていくかである。(山口委員長)
- ・ 集団指導としての意義・メリットを項目に落としたとき、現在のスキルディクショナリで十分言葉に落としているのか。(事務局横山)
- ・ 現在の評価項目の中にテンポやメリハリという項目がある。これは集団指導の意義・メリットの一部を反映したものである。加えて、評価者の側に集団指導の意義・メリットを認識してもらうことも重要である。(中萬委員)
- ・ スキルディクショナリの使い方だが、データベースとして使うのも良いかが、授業の構造化も本プロジェクトの重要な課題だろう。授業の構造化やスキルディクショナリに関するeテストなどを行って、理解度のチェックをしてはどうか。(大嶋委員)

今後のスケジュールについて

(事務局より資料6の説明。)

(2) 第2回研究委員会

平成20年度 学習塾講師能力評価システムの高度化に係る研究委員会

－ 第2回 －

日時：平成20年12月16日（火）10:00～12:00

場所：三菱UFJリサーチ&コンサルティング

9F円卓会議室

1. 開会

2. 議題

- (1) 学習塾講師能力評価システム高度化の体系と検討事項
- (2) 学習塾講師集団指導1級・2級試験のさらなる高度化に向けて
 - ①スキルディクショナリの最終イメージ
 - ②検定試験の評価項目・配点
- (3) 学習塾講師自習用コンテンツ（DVD）のイメージ
- (4) 今後のスケジュールについて

3. 閉会

配付資料

- 資料1 委員名簿
- 資料2 学習塾講師能力評価システム高度化の体系と論点の整理
- 資料3 学習塾講師のスキルディクショナリ（最終イメージ）
- 資料4 検定試験における評価項目・配点について
- 資料5 今後のスケジュール
- 資料6 学習塾講師能力評価システムの高度化に係る研究委員会（第1回）議事録

<議事概要>

出席者：

(委員)

山口委員長、伊藤亜矢子委員、伊藤政倫委員、稲葉委員、大嶋委員、川合委員、
中萬委員、仲野委員、横田委員

(オブザーバー)

経済産業省 伊藤係長、馬田係員

野村総合研究所 武田副主任コンサルタント、篠原氏

(事務局)

社団法人 全国学習塾協会 大木氏

三菱UFJリサーチ&コンサルティング 横山、豊島、高崎、小林

議題

学習塾講師能力評価システムの高度化の体系と検討事項

(事務局より資料2の説明)

- ・ この検定は単なる講師の足きり試験ではなくて、学習塾の講師として求められる能力・スキルが可視化できる手がかりになるものとなれば良い。(山口委員長)
- ・ 資料を拝見すると内容が非常に具体的になってきており、やるべきことが見えてきたという印象だ。(川合委員)
- ・ 2級の試験は既に実施されており、この資料でも2級については現実的で具体的になっている。若干の修正は必要になるかもしれないが、2級についてはおおむね提示していただいた設計で良いのではないか。一方、1級についてはまだあいまいな部分があるので、検討が必要になるかもしれない。(横田委員)
- ・ 後半の議論でも出てくると思うが、スキルディクショナリをどのように使うかという観点や、DVDとの組み合わせという視点も重要である。塾講師の学習の指標としてスキルディクショナリを活用する場合、単に講師に提示するだけではなかなか実際には使ってもらえない。スキルディクショナリやコンピテンシーを作っても活用されないということは良くあることである。一方で、スキルディクショナリやコンピテンシーによって、上手に企業内教育を進めた成功事例もある。(大嶋委員)
- ・ スキルディクショナリを作成して終わりではなくて、人的な交流などを介さないと、こういったものは伝わらないのだろう。(山口委員長)
- ・ 組織に任せるだけでもうまくいかない。ワークショップを実施するなどして、スキルディクショナリを活用するための工夫があるのとないのとでは、効果はまったく異なってくる。(大嶋委員)
- ・ 経営者のニーズや講師のニーズも汲み取られており、全体的には提示いただいた検定制

度の設計で良いのではないか。細かな点については配点の軽重などによってケアできると思う。自動車免許の検定ではスキルとして判断できる部分のみを審査するが、塾講師の場合は土台の能力が問われてくる。その辺りの折り合いをどのようにつけていくかが一番の課題である。(中萬委員)

学習塾講師集団指導 1 級・2 級試験のさらなる高度化に向けて

スキルディクショナリの最終イメージ

(事務局より資料 3 の説明)

- ・ スキルディクショナリは非常に良く出来ており、大変な労作だと思う。しかしスキルディクショナリを学習者にそのまま提示しても理解されない可能性が高いので、提示の仕方が大切ではないか。資料には「行動事例」と「行動基準」が示されているが、これを見せられると学習者は「行動事例」がそのまま評価基準になると勘違いしてしまう可能性が高い。「行動事例」に示されている事項を真似すればよいのだと誤解してしまうかもしれない。そういった誤解を避けるためにも、「行動基準」と「行動事例」の関連を整理する工夫が必要ではないか。(山口委員長)
- ・ ヒアリングによって十分な「行動事例」があがってきたと感じている。ただし行動事例が基準とイコールではないことは明示するべきか。言葉に表せないものは DVD で表現したいと思う。(稲葉委員)
- ・ ここに書かれていることをきちんとこなせれば大変なものであるが、ビギナーの人がこれを読むと、「行動事例」をひとつずつこなせばよいと誤解してしまいとんでもない授業になってしまう恐れがある。また、塾の方針によって適切な「行動事例」は異なる部分があるだろう。(横田委員)
- ・ なぜこの「行動基準」が作られているかという思想や考え方の部分をもう少し整理することが大切だろう。(山口委員長)
- ・ 「行動事例」の中に「この単元は〇〇校の入試でよく出る」といった事項が書かれているが、2 級試験のすべてのビデオでこの行動事例が入っていたら非常に奇妙である。(横田委員)
- ・ 単元と入試の関連性を説明することは生徒に目標を提示することが目的であり、あくまでも手段である。非常に面白いディクショナリではあるが、目的と手段が一緒になると、やるべきことばかりが増えてしまう。(山口委員長)
- ・ この検定を見る際、経営者的視点と受験者的視点の両方があり、どちらから見るかによって解釈は異なるだろう。今回のヒアリング対象者は経営者的視点が多かったのではないか。受験者的視点からすると、言葉がもっと平易なほうが良い。経営者と受験者の双方にとって魅力的なものでないといけない。

先日、ある塾経営者とこの検定について話をしたとき、「よく出来ている検定だとは思いますが、この程度であれば自前でも行っているためわざわざお金を出して受けるほどでも

ない」という意見だった。検定を売り物にするものであればもう少し独自のエッセンスが必要ではないか。(伊藤政倫委員)

- ・ベテラン講師の事例が加わったため、前回の資料よりもリアリティのある生き生きしたものになったと思う。強いて言えば、求められる行動基準の背景化・理由化について多少なりとも説明があれば受講者にとってより親切だろう。行動事例は使い方によっては非常に意義あるものになると思うが、あくまで参考事例として位置づけるべきだろう。しかし、ここであげられている行動事例を単にまねるだけでもたいしたものである。それだけでも受験者の水準は上がるのではないか。(中萬委員)
- ・伊藤政倫委員のおっしゃるように、こういった基準や事例であれば自前で行っている塾も多いだろう。しかし検定を作る1つの意義は、それをオーソライズすることにある。また、全体のボトムアップのためにも必要ではないか。(山口委員長)
- ・講師の研修にこれを使うととても良い資料になると感じた。あとはこれをどのように世に出していくかを考えるべきだろう。出し方によって資料の作り方も変わってくる。(仲野委員)
- ・事例があるので当校の教師にも読ませたい。しかしこれをそのまま使うと、教師に個性がなくなるかもしれない。スキルを言葉にすることには怖さもある。(川合委員)
- ・事例の持つリアリティは非常に貴重だと感じた。あえて言うと、より多くの事例があれば別の(オプションとしての)事例も出てくると考えられるため、受験者にとっても束縛が少なくなるのではないか。(横田委員)
- ・スキルディクショナリをこのまま提示するだけでなく、そもそも行動基準が重要であることを理解させることとで、事例があくまでも参考だということを示せば、今の議論は解決できる。

行動ユニットCの中に、導入・展開・まとめ時で共通する項目がある。共通項目があること自体はおかしなことではないが、何が同じなのかをきちんと明示して一貫して必要な項目と、導入・展開・まとめで異なる項目を整理すべきではないか。

汎用的で原則的な例と、特徴的で面白い例を分けてはどうか。そうした方が、吸収しやすい学習教材になるのではないか。

スキルディクショナリをワークシートのように使うことも考えられるのではないか。例えば事例の横に、「できた」「できない」を記述できるような構成も考えられる。(大嶋委員)

- ・伊藤政倫委員がおっしゃった、独自のエッセンスの意図やイメージをお聞かせいただければと思う。(事務局：横山)
- ・伊藤政倫委員は特定の塾経営者のお話をされていたと推察するが、大手塾の経営者は皆、一家言持っている。塾は市場原理に基づいた厳しい世界だから、お山の大将でないといけないところがある。そういった経営者一人ひとりの意見を吸い上げていくのは大変なことである。ここに書かれている行動事例を実行することは初心者にとっては非

常に大変だが、ベテラン講師にとってはイロハ中のイロハである。しかしこの検定の趣旨はボトムアップにあるため、塾の経営者一人ひとりの意見を全て組み込むことは難しいだろう。

この検定の趣旨はあくまでも塾講師のボトムアップにあるということを、経営者の方に訴えることが大切ではないか。(中萬委員)

- この検定の中に、原石のようにきらりと光る何かがないと魅力的なものにならないのではないか。具体的にはなかなか思いつかないが、ダイヤモンドが見えてこないとなかなか売り物にならないのではないと感じる。(伊藤政倫委員)
- 1級の議論が固まらないと、伊藤先生のおっしゃった部分を作り上げることはなかなか難しいと思う。
1級クラスの講師の行動事例を、全国から収集できるシステムを作れば、非常にすごいものができる。(中萬委員)
- 現在のスキルディクショナリには授業計画に関するスキルが入っていないが、授業計画がないと単に行動だけを見ることになるため、授業計画に関するスキルも必要ではないか。学校でもかならず指導案と授業の内容を確認する。また採点の前に計画案を見られたほうが採点も容易になるのではないか(山口委員長)
- 受験者は授業内容や生徒のレベルなどについて提出してもらおうことになっていたと思うが、それはなくなってしまったのか。(中萬委員)
- なくなってはいないが、時系列的な授業計画とは異なる。(稲葉委員)
- アンケートのようなものに授業内容や生徒のレベルなどを書いてもらって、導入・展開・まとめにしたがって評価すれば、採点は可能なのではないか。(中萬委員)
- 生徒とのやり取りを見る際も、ただやり取りしているだけなのか、計画性をもってやり取りしているのかは異なる。授業計画があればやり取りの的確さを評価できるだろう。(山口委員長)
- 既に2級の採点を行っているが、今年の検定には授業計画の評価はなかった。しかし講師がどのような生徒をイメージしているかは良く分かった。あらかじめ授業計画を把握せずとも、審査は可能なのではないか。(横田委員)
- 授業計画があることによって評価がしやすくなるということか。授業計画が現在の評価項目のどこに入ってくるかのイメージがわからない。ご意見を頂きたい。(事務局豊島)
- 1級合格者は教案をかけないとまずい。少なくとも教案を知っていないとならない。(山口委員長)
- 評価のときに教案があると、授業の流れが分かるというのはその通りだと思う。山口委員長がおっしゃっていたのは、適切な教案が書けるかどうかということだろう。現在のユニットを見ていると、授業のスタートから終了までのスキルディクショナリにしか見えなかった。先生のおっしゃっていた教案は授業のスタート前の段階である。準備段階のユニットを作成する必要があるのかどうかの議論だろう。共通項目としての授業準備

段階の評価項目を作るということでも良いかもしれない。

大学のファカルティディベロップメントでも授業計画が重視されている。その理由は、より効果的な教育をするためには、場当たりの授業ではだめであり、授業計画が必要だと考えているためである。(大嶋委員)

- ・ 現在の評価項目は Do だけを見ている。Plan がきちんとできるかどうか Do にも反映するし、Plan を見ることによって Do の評価も容易になるのではないか。授業計画を評価項目に入れるのであれば、準備段階のユニットを作るというよりも、共通項目の部分に入れることになるだろう。(山口委員長)
- ・ 2級の検定はすでに動き出しており、授業計画を評価項目に入れるとなると検定の性質が変わってしまう恐れがある。(横田委員)
- ・ 授業計画が極端にずれているにも関わらず、導入・展開・まとめがすばらしくなるということはありえないので、授業計画を採点対象にする必要はないのではないか。授業の対象者(生徒の学年・レベル等)や授業の内容についてきちんと説明がなされているのであれば、それで良いだろう。(中萬委員)

検定試験の評価項目・配点

(事務局より資料4の説明)

- ・ この基準で審査できると思う。「十分充足」の項目は2級では使わないということを審査する側が理解する必要がある。今までと比べると、そつなく一通りこなした人が合格しやすくなるだろう。(横田委員)
- ・ 横田委員のおっしゃるとおり、2級では「十分充足」は用いない。「十分充足」に該当するかどうかは1級たる部分をプラスで評価することを想定している。(事務局：高崎)
- ・ その部分を審査員がきちんと理解しておかないと、審査基準が厳しくなってしまう恐れがある。審査員に対する研修をきちんと行う必要があるだろう。(横田委員)
- ・ 配点のバランスはどうか。(山口委員長)
- ・ 資料をもう少しじっくりみていかないと、どういった配点バランスが望ましいか述べることは難しい。(横田委員)
- ・ 提示した評価項目・配点をベースとして、1月以降に実証実験をさせていただき、その上で配点バランス等について判断いただくことになると思う。(事務局：高崎)
- ・ 飛びぬけて良い受験者であれば、2級の検定であっても「十分充足」の6点をつけても良いのか。(中萬委員)
- ・ 2級の試験で6点はつけられない。そこを区別しなければ2級と1級を分ける意味がなくなってしまうと考えている。(事務局：高崎)
- ・ 一度採点をしてみないと何とも言えない部分がある。(中萬委員)
- ・ 12月末を目途に個別に意見を頂戴した上で、事務局案を皆さんにご提示したい。その上で検定の試行実験を試みたいと思う。その後で配点バランス・ウエイトや評価項目に

ついて精査をして、次回委員会で最終的にご議論いただくという形を想定している。(事務局：豊島)

- ・ 現在の採点項目は昨年の委員会で非常に活発に議論した。しかしあの時は授業を総体としてどう評価するかということが議論の前提だった。今回は項目間の配点のバランスが重要となる。導入・展開・まとめの配点ウエイトがこれでよいかという議論だろう。(横田委員)
- ・ 先日のヒアリング時にまさにその点についてお話をさせていただき、その部分をかなり反映していただいた。問題はこれが使えるのかどうかである。採点してみないとわからない。(中萬委員)
- ・ 論点がずれるかもしれないが、検定を継続して行っていくときに評価者が混乱しないようにすることも必要だろう。1級の採点表と2級の採点表が分かれていれば混乱は少ないと思う。(伊藤亜矢子委員)
- ・ 当然分けたほうが良いと思う。(中萬委員)

学習塾講師自習用コンテンツ (DVD) のイメージ

(稲葉委員より DVD の位置づけについて説明)

- ・ とても良い出来だと思う。(横田委員)
- ・ 評価項目のすべてについて網羅的に映像化するというよりも、受験者にとって伝わりにくい項目について映像化するという事だろう。(稲葉委員)
- ・ あまりにもあからさまな悪い例では意味がない。初心者がつまづきやすいところを DVD にすべきだろう。(山口委員長)
- ・ 良い出来だと思う。同じ講師でも、良い例のときと悪い例のときで服装も変えてはどうか。(中萬委員)
- ・ とても分かりやすい DVD であり、少々高価であってもすぐに買いたい。特定の部分だけをクリアにするという工夫があっても良いかもしれない。(横田委員)
- ・ 横田委員のおっしゃるとおり、もっとメリハリがあっても良いだろう。また、活用面の工夫をもう少し考えられればと思う。例えば、動画と連動した Web テストの作成やお金を払った塾はネット上でも映像を見られるなど、トータルな形でのデジタルコンテンツを考えても良いのではないか。ただし手間はかかるのでどこまで追求するかは難しい。(大嶋委員)

今後のスケジュールについて

(事務局より資料5の説明)

(3) 第3回研究委員会

平成20年度 学習塾講師能力評価システムの高度化に係る研究委員会

－ 第3回 －

日時：平成21年2月9日（月）10:00～12:00

場所：三菱UFJリサーチ&コンサルティング

品川第3セミナー室

1. 開会

2. 議題

- (1) 学習塾講師能力評価システム高度化に向けた検討
 - ①学習塾能力評価システム高度化に向けた全体像
 - ②スキルディクショナリの最終イメージ
 - ③検定試験の評価項目・配点、及び、評価マニュアルについて
 - ④学習塾講師自習用映像（DVD）の上映
- (2) 学習塾講師能力評価システム高度化事業報告書骨子について
- (3) 今後の普及策や取り組み課題について
- (4) 本年度のとりまとめ・講評など

3. 閉会

配付資料

- 資料1 委員名簿
- 資料2 学習塾講師能力評価システム高度化の全体像
- 資料3 学習塾講師のスキルディクショナリ
- 資料4 検定試験における評価方法・配点について（評価マニュアル）
- 資料5 学習塾講師自習用映像（DVD）の作成のコンセプト等
- 資料6 本年度事業の報告書骨子（案）
- 資料7 学習塾講師能力評価システムの普及策と今後の取組課題について
- 参 考 学習塾講師能力評価システムの高度化に係る研究委員会（第2回）議事録

<議事概要>

出席者：

(委員)

山口委員長、伊藤政倫委員、稲葉委員、大嶋委員、川合委員、中萬委員、仲野委員、横田委員

(オブザーバー)

経済産業省 高野企画官、伊藤係長

野村総合研究所 武田副主任コンサルタント、篠原氏

ギガビジョン

(事務局)

社団法人 全国学習塾協会 大木氏

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 横山、豊島、高崎、小林

議題

学習塾講師能力評価システムの高度化に向けた検討

学習塾能力評価システムの高度化に向けた全体像

スキルディクショナリの最終イメージ

(事務局より資料2・3の説明)

- ・ 「ハイパフォーマー」という言葉がどこまで認知されているのか疑問である。「優れた講師」といった表現が望ましいのではないか。「てにをは」を含めてまだ若干の修正点はあるので、別途事務局とすり合わせをしたい。内容について意見を頂きたい。(山口委員長)
- ・ この委員会では「カリスマ講師」という言葉がよく使われている。カリスマ講師という言葉は予備校では良く使われるが、学習塾ではあまり使われない。異なる用語を検討すべきではないか。(横田委員)
- ・ スキルディクショナリについてだが、資料3のp.4に記載されている行動事例は「必ずしも実施しなければならない行動ではない」と書かれている。こういった表現だと、「この種の行動を全く行わなくても構わない」と誤解される恐れがある。行動事例そのものではなくてもそれに類する行動を行う必要があることは明示すべきではないか。(横田委員)
- ・ 資料2のp.4で1級の検定について述べられているが、1級の在り方、試験実施方法は再考すべき点があるように思う。これまでの枠組みでは、1級の試験は実際の授業をビデオに撮影するという話だった。しかし集団指導の授業を撮影する場合、同じ集団指導であっても生徒の人数によって講師に求められる能力はかなり異なってくる。また授業は一回ずつが真剣指導の場であるが、それを検定に利用するとなると、塾の経営者は抵

抗感を覚えるのではないか。実際の授業を撮影するのではなく、模擬授業の実施などを検討すべきではないか。(中萬委員)

- ・ 同感である。塾によって授業時間が大きく異なるケースもあるため、実際の授業のビデオから評価を行うことは難しいのではないか。2級と同じように、ある程度「型にはめた」授業を映像で評価することも考えられる。(横田委員)
- ・ 1級の検定については、来年度、実施の予定で準備しているが、皆さんの意見をもう少し集約し、時間をかけて作りたい。(稲葉委員)
- ・ 資料を拝見して、非常によくできてきたと感じる。塾講師のスキルについて基礎的な事項を確認するには非常に良い。よりレベルの高いところ、例えば1級については、どのように評価するのが課題だろう。基礎・基本をしっかり抑えることについては非常に分かりやすくなった。(川合委員)
- ・ レベルの高い部分について、1級として共通して求められる要素を評価するということが強調すべきだろう。「ハイパーフォーマー」や「カリスマ」という言葉に引きずられてしまいが、この検定で評価する部分はもっと基礎的・基本的な部分であり、そのことを受験者等に対してアピールすることが大切である。(山口委員長)
- ・ 1級と2級の具体像がここでの資料とは別の形で明確になっているのか。明確になっているのであれば、スキルディクショナリとの関係もはっきりする。1級・2級の具体像とその定義との関連性が明確になれば、何を修正すべきか明らかになるだろう。(大嶋委員)
- ・ 同感である。現在の行動事例には1級以上の行動事例が例示されている。(中萬委員)
- ・ ご指摘の点は良く分かるが、行動事例がないと初心者は理解が難しい。しかし具体例はベテラン講師からヒアリングせざるを得ないので、ハイレベルな行動事例ばかり集まってしまう。示し方はどうしてもこのようになってしまう。(山口委員長)
- ・ 昨年度までの枠組みでは、1級の試験で実際の授業のビデオを用いることは適当だった。しかし今年度の議論で枠組みも若干変えざるを得ないと感じており、その認識は合意がなされていると思う。1級も模擬授業で評価するほうが適切なのではないか。設計された授業で審査するほうが矛盾はないのではないか。(横田委員)
- ・ 採点の基準をより明確にすることで、1級でも2級と同じような評価が可能ではないか。(中萬委員)
- ・ 1級の場合、生徒に対する臨機応変な対応を評価することも必要ではないか。(山口委員長)
- ・ 実際の授業の中で、例えば、生徒に対する臨機応変な対応が必要となる状況が現出しなければならない。今回の検定の枠組みでは、臨機応変な対応であってもそれが行動として現出しない限りは評価できない。(中萬委員)
- ・ 臨機応変な対応が必要とされる状況を作らなければならない。大学の授業でも研究授業というものがあるが、そこではあらかじめある程度設計された授業を評価する。研究授

- 業は模擬授業と実際の授業の中間的な位置づけといえる。ただし、学習塾でわざわざ1時間かけて研究授業に類するものを実施することは難しいかもしれない。(山口委員長)
- 実際の授業を撮影したとしても、生徒からのリアクションが授業のはじめの5分程度で出るとは限らない。当塾の模擬授業では、同僚講師等が生徒役になって授業を聞く。生徒役の講師に対して、「消しゴムを落とせ」「隣の生徒に話しかけろ」といった指示を書いたカードを渡しておいて、意図的にハプニングを仕込んでおく。(横田委員)
 - この検定について生徒とのやりとりが不可欠ならそういった要件を満たさないとならないが、VTR 授業であっても1級の試験の採点基準を引き上げることによっておおそ要件は満たされるだろう。いずれにしても1級についてはもう少し検討の余地がある。(中萬委員)
 - 2級についてはこれで良いだろうか。(山口委員長)
 - 1級はこれで終わりにはできないようなので、もう少し議論していきたい。2級については明確に表現されてきたので良いものができたと考えている。(稲葉委員)
 - 1級と2級の定義については、基本的には昨年度までの定義を準用させて頂いており、今年度は高度化すべき部分だけを着手している。ご議論いただいている1級のあり方についてはおっしゃるとおりだと思うが、今のご議論は1級の検定の枠組みそのものを変えてしまうようなお話だと感じている。本日の議論で、方向性だけでも合意頂きたいと感じている。(事務局：豊島)
 - 最後に議論の時間を取りたい。スキルディクショナリについてはおおそ合意頂けたと思う。細かいところは事務局で詰めていただきたい。(山口委員長)

検定試験の評価項目・配点、及び、評価マニュアルについて

(事務局より資料4の説明)

- 集団指導2級の評価はネガティブチェックを行うため、チェックシートの表現自体をネガティブにしている。実証実験によって、ここをポジティブな表現にしてしまうと評価がぶれることがわかった。完全にネガティブチェックにすることで、評価の安定性が高まる。(事務局：豊島)
- 2級合格ラインをホームポジションとして、それよりも悪くなっていき「これよりはだめだ」という水準が2級の合格基準になる。1級はホームポジションから加点をしていき、あるところが1級の合格基準となる。(事務局：高崎)
- 2級についてはかなり練られてきたと感じる。評価方法の完成度はかなり高くなってきたが、この仕組みを受験者がしっかり理解しないと、検定の仕組みと現実がずれてしまう恐れがある。また先日の実証実験でも申し上げたが、どの水準を超えれば1級なのかを明確にしなければならない。(横田委員)
- よく練られていてとても分かりやすい。なお、1級は模擬授業が良いと思う。受験者に会場に来て頂いて、審査者が生徒役になる。模擬授業をやるのもDVDを見るのも時間的

にあまり代わらない。審査員を生徒として意識してもらうことで公平性も保てるのではないか。(仲野委員)

- どういうスタイルでも課題がゼロになるのは難しい。審査員が生徒役になって採点することは難しいかも知れない。リアルな授業のほうが採点しやすいこともある。模擬授業とビデオを複線化することも含めて、採点・審査の形態についてはもう少し議論が必要だろう。(中萬委員)
- 評価指標についてはそれほど悪くないと思う。ただ単にふるいとしてやっているわけではない。(山口委員長)
- わかりやすいと思った。審査員3人で責任が重大だと思った。合格基準の共通認識が重要となる。また受験者側にこの基準をしっかりと伝えなければならない。これを徹底すべきだろう。(川合委員)
- ベテランの先生は少し見ただけよい講師かどうかは分かってしまうが、それだと客観性がないので、これだけブレイクダウンして要素化していただいた。よくできていると思う。ベテランの直観をこれだけブレイクダウンしているのはたいしたものである。こういった取り組みはあまりないため、かなり画期的だと思う。(山口委員長)
- 1級と2級の基準点の設定の仕方は非常によいと思う。この枠組みは大事にしたほうがよい。確認だが、p.10で「ただし、その協議結果については、受験者に対して伝達するものとする」とあるが、これは別にこのケースに限らず、こういった受験者に対しても評価を伝達するという理解でよいのか。(大嶋委員)
- 全て公開すべきという意味で記載している。(事務局：豊島)
- P.9で、5分経過の段階で導入部分を評価し、10分経過の段階で展開部分を評価するとあるが、この審査手順については受験者に説明するのか。(大嶋委員)
- 受験者に対して説明する。(事務局：高崎)
- 受験者がこの仕組みをきちんと理解して、2級がどういうもので、1級がどういうものかきちんと理解して受験させないと、後で不公平感が出てしまう。採点手法はしっかりしているので、それを理解させれば納得感も高くなる、それゆえきちんとした事前説明が重要である。(大嶋委員)
- 2級のベーシックな部分が明確化されるにつれて、1級の半熟さが明らかになってきた側面がある。1級についてはもう少し詰めた議論をしていきたいが、議論ばかりではなく早く運用したいという思いがある。1級受験者に名人芸を求めすぎるとどうしてもブレが生じてしまう。1級は名人芸を審査するのではなく、きちんとした授業のできる講師を評価するのだということを明確化したい。きちんとした形にするためには、来年度も経済産業省のご支援を頂くなどして磨いていきたいと感じ始めている。(伊藤政倫委員)
- 型を破ることが名人芸だとしても、型をきちんと理解して振舞えるのが1級だろう。型を理解せずに自分の経験だけに頼っている人も多い。(山口委員長)

- ・ 今回の枠組みで採点をした評価者に話を聞くと、この検定によって今までは自分の勘で判断してきたものが、より具体的にわかったという意見もあった。(伊藤政倫委員)
- ・ これはあくまでもたとえ話だが、この検定においては、ある塾の看板講師がその講師の弟子よりも評価が低いことはありうる。そんなとき「こんなテストはつまらん」という誤解が生じる可能性がある。この検定の得点が高かったからといって、それが上手さや凄さを示すものではないことをきちんと示すべきである。(横田委員)
- ・ この検定は、あくまでも一人前のレベルを評価しているということだろう。現在教職大学院では、「卓越した教師」という表現を使っているが、この扱いにも非常に困っている。(山口委員長)

学習塾講師自習用映像 (DVD) の上映

(DVD の紹介)

- ・ 前回の指摘を踏まえて修正がなされている。前回と比べてポイントだけがよく分かるように修正されていた。(武田副主任コンサルタント)
- ・ 悪い例が強調される形で映像化されておりわかりやすかった。良い例と悪い例で洋服も変えていたため分かりやすかったのではないか。(篠原氏)
- ・ 非常に分かりやすかった。(川合委員)
- ・ DVD では社会だったかが、学習塾のニーズは英語や数学にあるのではないか。(山口委員長)
- ・ 欲を言い始めたらきりがないのでよいと思う。ポイントを示すという意味で目的は十分達成している。(中萬委員)
- ・ DVD を社会科にした理由はあるのか。(仲野委員)
- ・ 特に理由はない。俳優の方が社会科講師を経験したことがあるとのこと。(事務局：豊島)
- ・ 素朴な質問だが、DVD でお示しいただいた良い授業の例は1級に値する授業なのか。それとも1級はもっと高い水準になるのか。(大嶋委員)
- ・ DVD の授業は1級の水準である。自学用教材として作成しており、これを習得すれば検定試験にも合格できる。(事務局：豊島)
- ・ スキルディクショナリは2級を想定して作っているのか。(大嶋委員)
- ・ 必ずしもそうではない。(山口委員長)
- ・ それであれば、このDVD がロールモデルになると思う。(大嶋委員)
- ・ 2級の方は良い授業をあまり見たことがない。良い授業見ること、講師が意識して行動をしようと思ってもらうこと自体が非常に重要である。そういった意味でよくできている。(山口委員長)
- ・ 前回の議論を DVD に反映いただいた。「やり過ぎた演技」になっていないのが良いと思

う。(横田委員)

学習塾講師能力評価システム高度化事業報告書骨子について

(事務局より資料6の説明)

今後の普及策や取り組みの課題について

(稲葉委員より資料7の説明)

- ・ 1級についていくつかご意見を頂いたが、できる限り早く1級を立ち上げる必要があるため、まずは論点を整理すべき必要がある。スキルディクショナリについては、今後つめる必要はあると思うが、おおむね合意していただいたと思う。
運営方法については協会様のほうで考えて頂くことではないかと思うが、実際の授業ではなく模擬授業で審査するというお話もあった。そもそもの目的として1級の検定で生徒と講師のトランザクションをいかにして捉えるか。制約のある中で次善の策をとっていかなければならないが、そういった点について論点を頂戴できればと思う。(事務局：横山)
- ・ 1級の半熟・未成熟の部分をもう少し詰めた形で事業を終了していただけるとありがたい。(伊藤政倫委員)
- ・ DVDや審査基準など、どの程度のものを公開する予定なのか。(山口委員長)
- ・ 自由に閲覧できるようにしたい。(稲葉委員)
- ・ この事業は公費で行っている事業であるため、誰もが見られる状態が原則である。(伊藤係長)
- ・ ひとつひとつの授業は商品であり、塾はお金を頂いて提供しているものである。検定で点数が取れるように授業を組み立てることはできるが、それは子どものための授業ではなく、講師や塾の都合で行う授業になってしまう。これは塾としての責任に関わる。実際の授業を採点用に行うことは問題があると思う。若干のマイナス要素はあるが、模擬授業等によって評価できると思うし、1級の位置づけが変わってきた状況ではむしろその方が望ましいのではないか。(横田委員)
- ・ 教育実習は研究授業というカテゴリであり、通常の授業とは違うが中間的なものとして位置づけられている。この検定でもそういった位置づけの授業ができないかと思う。(山口委員長)
- ・ 塾でも月に1回程度は研究授業・模擬授業をやっている。そういった授業では講師の対応力も見ることが出来る。1級としてはその程度のトランザクションを求めてもよいのではないか。また2級の試験は年に何回程度予定しているのか。(仲野委員)
- ・ 年間で1回やる予定だが、各地方でもやりたいという声が上がっている。時期を決めて各地方で行われる可能性はある。(稲葉委員)

- ・ 1級の試験についてはいろいろな形が想定できる。例えば模擬授業をするのであれば、3人の審査委員で30分近く採点に時間がかかる。ここで無理やり結論を出すことは難しい。本年度の議論によって、1級の位置付けが変わってきた。先ほどDVDを拝見したが、あのレベルが安心して任せられる1級の水準となる。以前の1級ではハイパフォーマーの入口くらいの講師を評価していた。そのこのところを明確にしないと普及の問題に関わってくる。(中萬委員)
- ・ 比較的大きな塾の経営者は、独自性で成長してきたという自負がある。そういった方々に、業界としてベーシックを定義することの大義を理解してもらわなければいけない。職人塾ではこのような標準化に抵抗感があるだろう。将来的には普及の戦略をあらゆる角度から詰めて頂きたい。業界として、この検定を採用するメリットをどのように醸し出していけるかだろう。(中萬委員)
- ・ 以前の1級では、講師として満足できる水準で評価していたが、今回についてはあくまでも最低能力を保証するレベルになっている。(山口委員長)
- ・ 検定として評価をするのだから客観性・普遍性が必要である。2級は、生徒とコミュニケーションを取るといった基礎的な事項について意識さえ出来ていれば良いだろう。1級は、講師からの問いかけによって生徒の中に「波紋」が広がるといったことが必要だろう。(川合委員)
- ・ 今日の委員会を通してお聞きすると、1級と2級のコンセプトはかなり固まっていると感じた。例えば、1級であってもカリスマ講師を意味するのではないということについては、皆さんのコンセンサスがあると感じた。そのコンセプト・コンセンサスを整理した上で資格制度やスキルディクショナリを精査すれば、詰めていけるのではないか。(大嶋委員)
- ・ 1級の評価方法については、前回の委員会では実際の授業を評価した方が良いという意見が大勢だったが、今回は模擬授業の方が良いという意見が多かった。この部分はどこまでいっても揺れ動くテーマだと思うので、一度決めてやった上で、次の段階の道筋をつけるということで良いのではないか。(大嶋委員)
- ・ この事業は平成17年度から経済産業省の支援のもと実施してきた。何とかここまで発展してきた。やればやるほど課題があるのは仕方ないが、こういった形で発展させられたことについて委員の皆様や経済産業省の皆様にお礼申し上げたい。(稲葉委員)

本年度のとりまとめ・講評など

- ・ 広汎に普及するのがこの事業のひとつの目的である。文部科学省がゆとり教育を進める際に、学習指導要領の「ミニマムスタンダード」という言葉を良く使っていた。しかしミニマムだけをやっている面白くない。我々は学習塾でお客様あつての業界である。今まで百花繚乱だったものにミニマムスタンダードを定義して、その上に個別の塾が味付けしていれば面白いと思う。(伊藤政倫委員)

- 学習塾のサービスは、講師と生徒の相互関係で生まれるサービスであり、スキルや能力を評価することは非常に難しい課題であるが、先生方には熱心にご議論頂き感謝申し上げます。経済産業省ではその他の分野についても人材育成に取り組んできたが、この検定を一つのモデルケースとして他のサービスにも展開していきたい。ご指摘にあったが、分かりやすい工夫・示し方について、塾協会を中心に、指針になるようなものになればよいと思う。(高野企画官)
- 一年間ありがとうございました。皆様のご協力で委員会は終了させることができたが、本年度事業の終了まで今しばらくお付き合い頂きたい。本年度は、スキルディクショナリという学校でも役立つものが出来上がったことが最大の成果と感じる。読売新聞で本検定試験が記事で取り上げられてから、教育委員会等からも問い合わせが入っていると聞く。今後いろいろなところから注目されると思うし、注目されたいと考えている。その分社会的責任も増すことを忘れてはならないと思う。一年間どうもありがとうございました。(山口委員長)

以上